

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回）日發行
昭和十六年十月廿日印刷納本昭和十六年十一月一日發行

第七卷 第十二號

淨土



金

二十 月 號

陸海軍 病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願ひ致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

中村 辨 康 著

近刊豫告

日常勤行式講讃

「日常のおつとめ」と經文の解説とを兼ねた便利な修養書！
座右に備へて正しい信仰に精進せられよ！

淨土宗で必要なお經文を全部納めて誰にでも解るやうに一々懇切な解説がついてゐます。即ち一々のお經文について和譯と意譯とをあげ、それに中村師獨特の麗筆を以て懇切な解説をほどこし、更に字解までつけて一讀よくその深底を味ひ得るもの。會員各位の佛壇に供へて修養に最適です。僧侶各位の書架に一書を加へて手近かな修養の參考資料となり、説教その他の教材に最も便利です。

B 6 型 クロース 装

價一圓五十錢

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

淨土十二月號 目次

表

紙

鈴木金平

扉・目次カット

米倉隆從

佛名會のおはなし……………高瀬承嚴(六)

初冬の日ざし……………吉田絃二郎(一六)

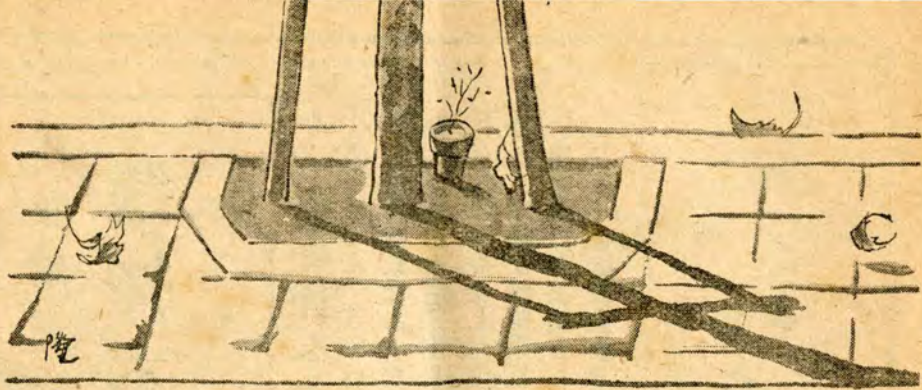
先師を
語る
渡邊海旭先生……………増谷文雄(三)

感念
話佛
スヰツチの先生……………伊藤宏天(三)

興亞觀音堂天井の龍……………(三)

信仰相談……………擔當 中村辨康(四)





靖國の上京遺族を訪問……………山崎生(四)

童話 勇敢なビボー……………小林一(三)

或る病兵の手紙……………編輯部(三)

まんが廻覽板……………漫畫協團同人(二)

歌壇……………與謝野晶子選(二)

俳壇……………太田耳動子選(七)

柳壇……………西島○丸選(一)

法語
解説

何うして信仰に入る……………中村研康(五)

會のたより……………(四)

編輯後記……………(五)

淨土十二月號 目次

林隆碩師著

選擇本願念佛集講話

△跋——藤堂祐範師「書誌學上より見たる選擇集」

四六版約二百頁本文九ホ
表紙勅傳「選擇御製作の圖」の
模寫

寫眞版京都廬山寺藏(國寶)
選擇集稿本

定價金七十錢(送料金六錢)

◇……林隆碩師曰く「元祖大師は既に七百三十年の昔、極樂へ還へらせたまひ、その後尊容に接すべくもありません。され、こゝに選擇本願念佛集の存するありて、祖師の法身に面し得るは、眞に長夜を照らすの靈光であります。」と

◇……實にや選擇集一卷は淨土宗の魂であり、生命であります。この集の存するところによつて七百年前の祖師に見參し奉り、吉水の流れが清く濁らず、何時／＼までも流々傳々するのであります。

◇……本書は林隆碩師によつて、昭和十四年一月號から同十五年三月號までの華頂誌に連載された「選擇集講話」を基礎として新に増補訂正を願ひ、更に跋として藤堂祐範師にお願ひし、師多年の御研究になる「書誌學上より見たる選擇集」を附しました。行文極めて平易、在家向としても好適であります。

京都市東山區林下町知恩院内

發行所

華頂文社

振替大阪二五六一二番(知恩院)

淨土

十二月號

現世をすぐべき様は、念佛
の申されん様にすぐべし。念
佛のさまたげになりぬべく
ば、なになりともよろづをい
とひすて、これをとどむべ
し。

法然上人御法語





佛名會のおはなし

一年中の罪障を懺悔する行事

高瀬 承 嚴

(一)

菅原道眞の文章を集めた『菅家文章』巻四に「一切衆生煩惱身、

哀を求めて懺悔し能仁を仰ぐ(中略)、年の終りの三日心の馬を繋ぎ天下一時に法輪を轉ず、發願以來五十載、星霜は故きが如く事は新しきが如し(中略)、香は禪心よりして火を用ふることなく、花は合掌に開きて春に因らず、歸依一萬三千佛云々」とある。これは、道眞が任地讃岐にあつたある年の暮に、任地で佛名會を行つた時に作つたものである。彼が非常に敬虔な信仰生活を行ひ、社寺參詣にも形式にとらはれず、誠意を以てすべきを主張したことは、彼が「こ

のたびはぬさもとありあへず手向山、もみちのにしき神のまにまに」と謡つて手向山八幡に參拜してゐるを見て知り得るし、前に掲げた文章に「香は禪心よりして火を用ふることなし、花は合掌に開きて春に因らず」と述べてゐるによりて知ることが出来る。このたびは云々の歌は、最もよく知られたものであるから、別段に説明する必要もないが、「香は禪心より云々」の句について一言述べると、佛樣を參拜するには香をたいて御供養申上げるのが通例ではあるが、今は然るべき名香の持ち合せがない、けれども佛樣は必ずしも名香をたいて御供養致さずとも、眞心をこめて禮拜したならば、きつと私共の心持を御承知下さるであらうから、わざわざ火に香をたかなくとも良い、又、今日は佛樣に捧ぐべきあの春になると咲き競ふきれいな花の持ち合せがない、けれども眞心こめて合掌して禮拜

するならば、きつと佛様は私の心持を御承知下さるであらう、といふのである。

去年の今夜清涼に侍す 秋思の時篇獨り腸を斷つ、恩賜の御衣はいまここにあり、捧げ持ちて毎日餘香を拜すと、大宰府にありて遙かに京都の皇居を拜して誦はれ、死後には天神様と仰がれてゐる道眞のやうな誠忠無比な人であるから、このやうな歌や文句も、そのままで良いが、若しこれを道眞を中傷した時平のやうな人が述べたとしたら、私共は、神様や佛様におまゐりするのには、形式に囚はれる必要ないといふものの、むしろ嘲笑のたねとするぐらゐるものである。

(二)

あの至誠の權化といはれてゐる菅原道眞が、行つた佛名會とは、一體どのやうなことであるか。これは亦、佛名懺悔、佛名禮懺、佛名大會、佛名懺、お佛名ともとなへ、陰曆十二月十九日から一日乃至三日間、宮中を初めたてまつり、全國の寺院及びそれぞれの家庭で、三千佛名經の所説に基き、過去の千佛、未來の千佛の御名をとなへ、その年中に犯した罪過を懺悔することによりて清淨な身心となり、新しい年を迎へむとする法會であつて、神社で行はれる大秋によりて身心ともに清淨となるといふ信仰と同じものである。

印度で、この法會が行はれたといふことは少しもわからないが、

支那の北魏時代に、菩提流支は二萬一千九十三の佛菩薩の名を列擧し、この佛名をとなへ、思惟し、讚歎する者は、現世安穩にして諸難を除去し、諸罪を消滅して、來世は無上の妙果を得べしと説いた十二卷の佛名經を翻譯してゐる。これによると印度でも佛名をとなへて罪障懺悔を行つたとは思はれるが、これがどんな様子で行はれたかは不明である。

支那では、相當盛に行はれたらしく、前に記した菩提流支が翻譯した經典が讀まれたばかりでなく、非常な流行で、菩提流支の譯したもののだけではものたりなさを感じたと見へ、隋の時代に法藏といふ學者が編纂した一切經の目錄である衆經目錄を始めとしてその他の學者がいづれもインチキのお經であるといつてゐる報達菩薩問報應沙門經の一部を引用するばかりでなく、いろ／＼なお經の名や、澤山な佛菩薩及び阿羅漢の名を加へ、十二卷の菩提流支譯にかかる佛名經を三十卷といふ大部なものが、無名の編纂者によりて作られ、世に行はるやうになつた。この三十卷佛名經の名が初めて見られるのは、唐代の智昇が編纂した開元釋教錄卷十八であるから、唐代の中頃になると、この種の經典を讀む法會の必要を生ずるに至つたらしい。そして支那でこの法要が盛に行はれたことは、いろ／＼な書物に見へてゐる。殊に白氏文集卷卅五にある白樂天の「香火一爐燈一盞、白頭夜禮佛名經、何年飲著聲聞酒、直到如今醉未醒」との一齣はあまりにも有名であり、我が平安朝の文人間にも

てはやされた詩である。

(三)

我が國では、この法會がいつごろから始まつたかといふと、公事根源といふ書物によると、寶龜五年であると述べ、毎年十二月十九日から廿一日まで、三世の諸佛の名號をとなへ、六根（眼耳鼻舌身意をいふ）に犯す罪を滅ぼすのであると述べてある。我が國でこの法會が十二月もおしつまつた時に行はれるに至つた理由は、別に述べられてゐないし、又、佛名經にも十二月に行へとは述べてゐないが、菩提流支の翻譯にかかる佛名經に、若し人々、もろくの罪障を消滅したいとならば、きよく洗ひたる新らしい衣服を着け、長跪合掌して佛を禮し、經を讀誦し、懺悔をなすべしと述べてゐる。

佛敎では、我々人間は日々の生活に於て思はず知らずに澤山な罪を犯してゐる、けれども、これは何とも防ぎようがないから、悪いことをしたと氣がついたら、即座に懺悔せよ、懺悔したならば、清浄な人間になれる、だから犯したと知つたらすぐ懺悔せよと教へてゐる。即ち、たとひ過つて罪を犯すこともあるも、一度懺悔したならば、更始一身の生活に進むことが出来る。この思想から、年の暮にあたり、一年中に犯した罪を懺悔して身心ともにすがすがしいものとなり、新しき年を迎へて新生活に入らうと考へたもので、かの年の始めに行はるる御齋會によりて、一年中、幸福であらうことを

祈ると相俟つて、始められたものであらう。公事根源は何に依りて、この法會が寶龜五年に始められたと定めたかは分らない。けれども、弘法大師が師匠である勤操のために作つた餐の一節に「禮三千佛名二十一年」とある。勤操は天長四年に歿してゐるから、これから二十一年を逆算すると大同二年になる、大同は延暦の次ぎであるから、平安朝の初頭には既に佛名經を讀誦することが行はれてゐたことは十分に知り得られるし、いはゆる懺悔の法が奈良朝に行はれたことは天平文書にも見らるるから、或は佛名經を讀んで懺悔の法が行はれたのは、奈良朝の寶龜頃からであつたとも想像は出来ることである。

(四)

宮中で佛名會が行はれたのは、天長七年道眞が修したてまつたのが始めであると三代實錄に見えてゐるが、また毎年行はれる恒例とはならなかつた。これが恒例となつたのは、續日本後紀に見えてゐる承和五年十二月の佛名會からである。この時の佛名會は奈良興福寺の淨安が、勅を奉じて澤山の僧侶を引率して参内し、清凉殿で盛に行はれたとある。これは宮中の佛名會であるが、勅命に依り天下、特に當時の各國府即ち今日の各道府縣廳で、恒例として行はしめらるるに至つたのは承和十三年からで、この頃は毎年十二月十五日から十七日まで行はしめ、天下に命令してこの日の間は殺生を禁

せしめられるほど、國家的な大行事となつた。仁壽三年になると、これまで十二月十五日から三日間行はれてゐたこの法會を、十九日から廿一日までに改められ、貞觀十三年には、この法會の本尊として三十卷本佛名經に依りて一萬三千佛を一鋪に畫いたもの七十一鋪を作り、太政官、圖書寮、太宰府觀世音寺、宇佐八幡宮寺各一鋪、五畿内(山城・大和・河内・和泉・攝津)に五鋪、南海道(紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊豫・土佐)に六鋪、北陸道若狹・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡)に七鋪、東山道(近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野・陸前・陸中・陸奥・羽前・羽後の中三ヶ國は隣國に合同)山陰道(丹波・丹後・但馬・美作・伯耆・出雲・石見・隱岐)山陽道(播磨・美作・備前・備中・備後・安藝・周防・長門)に各八鋪、東海道(伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・甲斐・伊豆・相模・武藏・安房・上總・下總・常陸)の各國府に十五鋪を配置された。

かくのごとく、佛名會が、國家の大行事として宮中を初めたまつり、地方廳にも行はれ、その經費は正税即ち直接國税を以て交辨せられる、今日でいふと、國の通常豫算の一目として組まれて行ふといふ、今から考へると夢のような盛大であり、嚴重な儀式であつた。かくのごとく、一萬三千佛を畫いたものを本尊とし、三十卷本佛名經を讀むで、この法會は行はれてゐたが、延喜十八年には讀む經典は梁代に無名の翻譯者に依りて譯された三千佛名經(過去莊嚴

劫千佛名經、現在莊嚴劫千佛名經、星宿莊嚴劫千佛名經)に代へられたが、本尊はやはり三十卷本佛名經に依る一萬三千佛が用ひられ、宮中で行はれる時は、御殿の廊下に地獄圖の屏風を立てめぐらし、地獄の恐るべく、懺悔の必要なるを感ぜしめるやうにされてゐた。宮中におけるこの法會のおごそかなことは、當時の物語類にこまごまと記され、女官たちが、地獄の悲惨、酷烈な苦しみの有様を見て、悶絶し、自分の日常行爲を反省したと述べてある。

(五)

當時は宮中、官廳國府などに於て行はれたばかりでなく、各層の人人の家でも盛に行はれ、それに招かれて赴く僧侶の有様を兼盛集といふ歌集に十二月佛名する家と題し「かぞふれば我が身につもる年月を送り迎ふと何いそくらん」と謡つてゐるし、前に掲げた道眞の文及びいろいろな歌集、物語類に依りても知ることが出来る。兼盛の歌は、いかにも、當時の僧侶達が、都大路にある信者の宅に迎へられて佛名會を行ふために、忙しさに右往左往してゐる有様を、まのあたりに見られるやうである。ある學者の説によると、十二月の異名を「しはす」(師走)といふのは、佛名會をそれぞれの家で、行ふために呼ばれる法師が、忙しさうに走つてゐるから師走といふのだとある、相當にこぢつた話ではあるが、面白い解釋でもある。

又、平安朝では、宮中を初めてまつり、官廳や、地方國府や、個人の家で行はれたばかりでなく、有志が集つて、僧侶を招き、行つたこともある、これは主として當時の知識階級、文人達が相集つて行つたもので、相當大々的に行はれたやうである。

平安朝も末になると、官廳や地方國府での佛名會は、だん／＼と衰へたが、宮中におかせられては、多少隆盛の差はあるにしても、又日數も一日、或は二日、或は三日といふやうに其の時の都合に遊ばされてはゐるが、應仁の兵亂までは行はせられてゐた。又民間の佛名會も、いつといふことなしに衰へてしまつた。けれども、この民間各個人の家で行はれた佛名會が、徳川時代になつて宗門改めに依る綱紀となつたことも、佛教文化史、佛教風俗史研究上、興味あることである。

戰國時代には、何れの寺も、何れの家も、昔からの慣例をそのままに守つて行ふことも出来なかつたから、辛うじて寺々では型ばかりのこゝろを行つてゐたやうであるが、秀吉の時代を経て家康が征夷大將軍の命を拜し、幕府を江戸に開いてからは、基督教禁壓の政策から佛教を重要視し、各寺に對し深甚な保護を加へ、大破した寺は修理を加へ、或は再建し或は擴大し、あらゆる行事を復興させて、民衆を佛教で統御して行くことにしたため、それぞれの寺における恒例の法要も盛に行はれることとなり、従つてこの佛名會も古例を重んずる寺及び個人の家でも行はれ、それに參詣する者も、群をな

す有様であつた。

従つてこれを認識したものの數多く傳へられてゐて、その行事がどれほど民衆を導き教化を興へてゐたかを知れることも出来る。けれども、今その一々を擧げることも出来ぬから俳諧の一二をその代表として記してみよう。

翠簾の灯のこぼれて寒し御佛名

佛名や柿の衣の僧ばかり

佛名ややごとなき身の罪は何

御佛名袖の虱も過去の縁

浪化
召波
驚喬
秋杵

これらの中、第一は、やはりこの時代も昔ながらに、この法會が夜勤められてゐたことを、第二は、この法會は他の法會のごとく、華美なものでなく、出仕してゐる僧侶も決して金襴の袈裟などを着用せず、質實な色合の法衣を着用してゐたことを、第三は、これによりてこの時代にも上つ方におかせられても御勤め遊ばされたことを伺ふことを、第四は、賤が伏屋のむさくるしい家でも行はれてゐたことが知られる。

現代では、この法會は極めて少數な古格を重んずる寺々で行はれるにとどまつたが、平安朝時代、宮中、府中、地方國府、下つてはそれぞれの家々で、十二月になると、競ふて行はれたのを思ふて、全く時の流れの目まぐるしいのに驚かされる。

歌壇



興謝野品子選

東京上野昌子

いとまなき征野の夫子と思へども
いづこにか見んこの十五夜を

評 夫を戦地に送つて、留守を守る妻が

中秋の名月を眺めて、思はずつと

いた吐血である「戦場」に出るのあ

なたはさぞお忙がしくて、寸暇も

ありにならないでせう。けれど、私

が今あなたを思つて眺めてゐるこの

名月を、あなたもどこかの土地で、

眺めていらつしやうはしませんか。

同じ月をあなたも無事で見てゐると

思ふ時、私の心も幾分慰められます。

北海道 山本由馬

吐く息も眞白に見えて秋さむし横

津ヶ岳は初雪すとも

評 北海の地に冬の來ることの何と早い

こととせう。まだ秋が來たばかりだ

と思つておましたらもう吐く息も水

つて白く見え、横津岳には雪が降つ

たさうですと、あわただしい季節の

推移を感思してゐる歌。

長野縣 丸山力、園

一村の取入れ終り空稻架に雪降り

止まず戦地を思ふ

評 村中の收穫は終つて、田の時の稻架

にはもう一束の稻もかかつてゐませ

ん、その空しい稻架に雪が降りかか

つてゐます。早くとり入れの済んだ

安堵と満足感の足りた心地の中で、

雪を見てさて戦地を偲んでゐます。

村の誰も彼れも兵隊にとられて居り

ますから。

久留米市 松尾順

物枯れてさびしきままに菊の花わ

が對すれば秋深かきかも

いで征きし日とことかはり祭壇に

供物かざりて子の靈むかふ

評 滋賀縣 美鈴橋笛子

眼さむれば物思はする蟲の音上征

野の夫は如何にかあらん

評 東京 栗山みさを

日の暮れて征野の吾子を思ふとき

椎の香ぞ立つ風にはこぼれ

評 東京 小泉妙春

亡き母にいまもかしづく習ひして

心しづかにみ名を唱ふる

京都市 白峰敬夫

米をとく我が手につきし穀象のよ

く太れるが憎くあるかも

小樽 平井正念

親の親またその親の魂まつり榮え

ひさしき家なれげこそ

廣島縣 上原四四人

ゆるやかに鰯雲ゆき高原の秋のけ

はひのいよ上深まる

北海道 中村茂舞

橋もみち續く山路の頂きに望む入

江の静かなるかな

奈良縣 寺田カヅ

清らかに打水したる朝まだき颯と

兵出つコスモスの家

栃木縣 大輪云海

きは立ちて夜明くる前の静けさに

近く鳴るなり川の瀬の音

東京 小柳壽

病む身にて見えぬ名月偲ぶれば秋

風立ちて蟲の音きこゆ

東京 川田邦彦

嵐いつ静りつらん秋の夜に起き出

でて聴く犬の遠吠

北海道 前野寛一

あなかしと侍醫をつかはしたまひ

つる大御心にいかか答へむ

茨城縣 眞木謙太郎

朝餉すと厨に入れば茄子の上に馬

追かすか鳴き居たりけり

京都 華山千高

まろやかに都をかこむ山並に秋の

霖雨の今日も降りつぐ

大阪 田中 生

起き出でて露けき田道すぎゆけば

まろやかに見ゆ葛城の山

秋田市 篠崎枯葉

我れいまだ人の情を知らざれば尾

花まねけど行くところなし

名古屋 江崎孝昭

いつしかと秋は來にけりこそぞの世

にながめし月の戀しかりける

北海道 富澤幸雄

夏の夜に蟲啼きこゆ戦死せる友

のみ墓の前にさびしく

北海道 花田順住

亡き後の友やあらんと残しおく心

をこめし水くきのあと

青森縣 丸尾傳山

秋の雨降りつつきては村人の心も

空も曇る今日かな

投稿規定

はがきに一四二首以内と
して一筆土に親類部歌壇で
あて住所氏名明記の上送
ること

念佛
感話

スキツチの先生

伊藤 宏 天

再び死生觀に就いて述べさせて下さい。

先ごろの事であります。京都で有名な絹織物を専門に取り扱はれる〇〇店で、春に一回と秋に一回と、年に二回宛、三夜連続の修養法座が數年間開催されました。お宿坊の住職と同窓の關係でその専任講師に私が紹介されたわけであります。昭和十二年の三月が第一回で、その節の講義要目を印刷して、人生六講と名け、今も尚ほ、隨所にテキストとして、使用されて居るのでありますが、第二回が同年の十月で聴衆は、お店の衆五十名程を中心に町内有志の方が參會されて、約百名の商業人ばかりであります。

忘れもしませぬ。此の第二回の十月の時です。お約束の時間にお店へ着きますと、其の日の店務は既に終了し、店員一同三々五々に雑談を交はして閑談を待たるゝ形であります。私の顔を見るや小店員數名は、行儀よく居並んで出迎への禮をして呉れます。店主は私を應接間へと先導されます。拭きこまれた廊下の板、手のこんだ中庭、京都の舊家、古い信用を持ったお店を想像して見て下さい。凡そ近代式なビルデングに依つて營まるる、月給制度による會社がかつた店舗とは趣きを異にしてをります。

粗忽に歩けば迂りこけさうな此の廊下を、

店主に案内されながら、静かに進む私の後の方で、無邪氣な小店員の聲とおぼしく「スキツチ、スキツチ」と、二度三度繰り返して聞えて来る。口さがない小供とは思へども、斯う後ろからあびせられては、餘り好い氣は致しませぬ。

「何だ、人を馬鹿にしてやがる。まるで、電燈が來たと云はんばかりに」

斯う云ひますと、既知の誌友は私の頭を思ひ出して

「フン、成る程」

と、微苦笑を洩さるるか解りませぬが、未知の誌友よ、御安心あれ、さほどでも無いのですから。饒がては、法然上人の「圓光」にあるが如くは居りますけれど。閑話休題として。別に立腹とまでは行かんでも、一寸、いやな氣持に襲はれながら應接間に落ち着くと、店主は、改めて叮嚀な挨拶をして

「先生、唯今の小役（小僧のこと）の聲を何うぞ悪く取らないで下さい」

「悪く取りましたヨ」



「それは恐れ入ります………実は、三月に、第一回三日間、懇々と御教訓を蒙りまして、七月に事變突發、八月末に當店から〇名の應召者を出しました」

「其れは御苦勞さまです。皆、御無事に………」

「有難う御座います。其れに就いて、先生に歡んで頂き度いことが御座いますので」

「承りますが、開會の方は」

「店の方は何時でも、準備は出来て居りますが、スキツチの辯解を致しませぬと……」

「その昔に忘れてゐたのですが、斯う云はれて見ると思ひ出す。冗談に「悪く取りましたヨ」と云つたのが悪かつたらしい。」

「イエ、辯解では御座いませぬ。そのスキツチに就きまして」

「またしてもスキツチが物を言ふ。謹んで聞かざるを得なくなりました。店主は大まじめです。寧ろ感激に顔を輝かせて居られます。感謝に眼がうるんで居られるやうにも思へました。其れは店員の〇名が應召の門出の朝の感激が未だに去らぬものと後で解つたのですけれど。」

「先生、お召しを受けた〇名が、出がけに斯う申して呉れたので御座います。」

「檀那さま、行つて参ります。三月の修養法座で伊藤先生から承つたスキツチのお話がよく解つて居ります。よしや敵前上陸に片足かけたばかりで、トン、コロリと倒れまして、決して残念とは思ひませぬ。それまでが私の御用、御用がすんだから、阿彌陀さまがお手許でスキツチをお切り遊ばしたのだ。」

スキッチが切れたら電燈は消えるが道理、電燈の消えるは用事がすんだから、用事がすんだら長居は無用、サツサと親元へ返るばかり、檳那さま、魂の故郷は阿彌陀さまのお膝元です。スキッチの切れる最後のひと息まで、まめやかに御用をつとめて参ります。御安心下さい。立派に御奉公をして参ります。左様なら。皆様、有難う御座います。左様なら、先生、赤だすきも甲斐甲斐しく、安心決定、死生たゞ命のまゝなる覺悟のもとに出征して呉れたので御座います。スキッチのお説明が餘程よくわかつたものと思はれます。先生、有難う御座いました。其れからあと、先生には御迷惑でせうが、私の店では、先生のことを、スキッチの先生と申して居りますので、今も小役の連中が、先生のお顔を見ると嬉しがりましてスキッチ、スキッチとさゝやきましたやうなわけで……」

わけを聞いて見ると、全く悪い氣は致しませぬ。死生觀を説く、かりそめの譬喩のつもりで居たものが、斯うも強い反響を呼んだか

と思ふと、當人の自分さへ、感激に近いものが胸に迫るのを覺えました。年が年中、よい氣になつて、講演だ法話だと、歩き廻つて居りますが、聞きなれた人になると、兎もすれば

「お坊さんは、商賣がら、あゝ云ふことを説くものサ」

と、軽く聞き流さることが多いのに、これは又念入りな、特に、身に引き當てて力強く聞き取られたことが有難いのです。最近のことですが、農業報國、増産挺身隊の練成講習に出席して、このスキッチの一段を説明しました。其の後、數日を隔てて、思ひ設けぬ地方の御住職が訪ねて來られ、

「村の青年の一人が、挺身隊の練成講習で結構なお話を承つたさうで、飯宅の後、或る會合の席で承つた要領を復説したらしいのであります。すると、集つて居た者の大半が、自分等も何時お召を受けるか解らぬ身だ。出かける前にシツカリと安心を決めて置き度いと思ふ。其う云ふお話が是非聞き度

い。和尚さん、一つお願いして來て下さい、このことでお伺ひしたので御座いますが、御多忙中、まことに恐れ入りますが……」

とのこと、私は嬉しかつた。斯うして電氣の御用が又一つ増したのであります。スキッチのお話が、餘程よく解つたらしい。轉じて先年、私は此のスキッチの辭を、小さなパンフレットにして三千部ばかり諸方へ散布した折、親族の姪や甥たちにも届けました。そして讀後感を求めたら

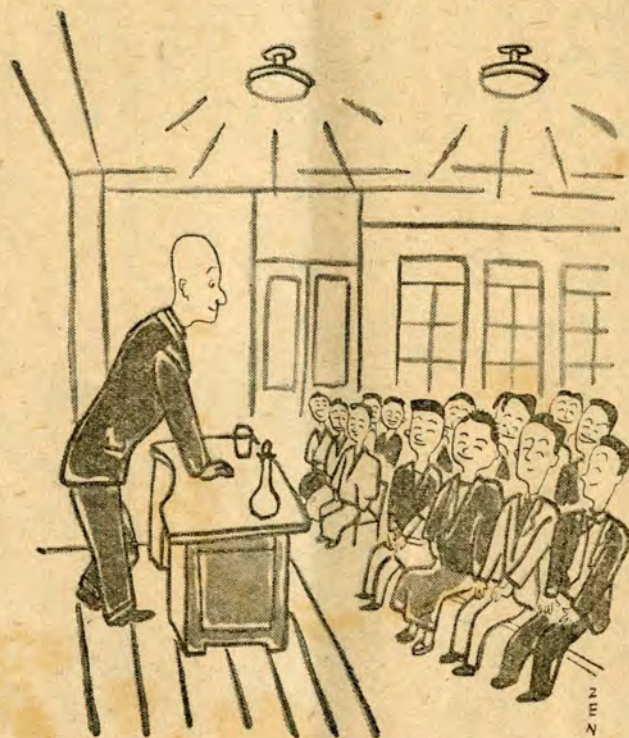
「伯父さん、スキッチの所が一番よく解りました」

とのことでした。「スキッチの伯父さん」と、呼んで居るか何うかは確かで無いが、此の一段、何所へ向けても評判が良いらしい。

其の内容は上來既に盡してゐますが、最初私は「人生」を解いて、第一に「人として生れた」と訓じ、其れを「折角」と信愛するやうに勧め、

『折角、人として生れたのだから』と、おがみにまで導かんと努めます。

法然上人の
「受け難き人身を受けて」
と、悦び玉ひ
し御法語に學
ぶのでありま
す。佛青の禮
讃文前序には
「人身受け
難し今既に受
く」
と、讀へて居
ります。斯く
て私は「折角」
と力を入れる
のであります
が、理窟つば
い人は
「生んで下
さいと頼んだわけでは無い。生れるぞと頑張
つて出て来たわけでも無い。知らぬ間に生れ
て来たのだ。何が折角だらう」



と云ふかも知れない。成るほど其の通り、
知らぬ間に生れた人ばかりであります。この

事ばかりは、お釋迦さまでも御存知あるま
い。恐らくは知らぬ間にお生れになつてゐる
筈であります。其れを「折角」と氣のつく

ころ、信愛するところが大切なのでありま
す。氣がつかねば其れまでです。覺せずば止
むです。覺すれば正しく覺す可し。人生正覺
の入門は、折角と氣のつくことです。つま
り、知らぬ間に生れたことを。自己本位に考
へてゐないで、其の本をたづねて、神わざ、
佛わざなりと信愛するのであります。合點が
行くではありませんか。大楠公正成が、志貴
山の毘沙門天の申し子であると云ふことも、
法然上人は母秦氏が岩間寺の觀音さまへ願を
かけられての事と申すのも、皆この事であり
ます。

私は強い自信を以て私の法説を語ります。
愚かな私、乏しい私ですけれど、何所か一つ
は佛さまのお眼に叶つたと見える。故に、こ
んなヤクザな者でも、何か一つはお役に立つ
と、阿彌陀さまの思し召に叶へばこそ、此の
世の中へ送り出して下されたのだと、私は、
朝夕にこの胸を抱いて、阿彌陀さまを懷かし
んで居ります。その御用は何時まで何所まで
つづくのか私には解りません。又、知らうと

も思ひません。五十年か七十年か、其れとも今が今、斯う申しながら此の演壇上で、御用が終るのかも知れません。たゞ此の呼吸のある間は尊い御用が仰せつけられて居るのだと思ひ定めて居ります。

時節柄このお言葉でも味つて頂けよう。

帝國軍人に對して「朕は爾等を股肱と頼む」と仰せられた御聖旨です。軍人も様々、上は元帥大將から下は特務補充兵まで、失禮な言葉使ひですが、身分の輕いと思はれる特務兵も、股肱と頼まされた御聖旨にかわりはありません。應召の特務兵、私も幾人かを驛頭に歎送致しました。あの輝いた顔、雄々しい姿、身を捧げて御用に立たばやの決心、みな股肱と頼まされた御聖旨を胸に抱き締めてであります。更には「いくさの庭に立つも立たぬ」の御製により、残れる者も、等しくお役に立たばやの赤誠で御座います。

私自身、既に阿彌陀さまの思召により、遣はされたる此の身であり此の生命であると、謂ゆる生命の本質（魂の故郷）を思ひ定め

ました以上、仰せのままに御用つとむるばかりで御座います。此れを南無（飯一命令）の生活と申すのです。この阿彌陀佛に南無することが「生き往く道」を決定するのであります。生かされて往く道であります。

一念に一度の往生をあて置き玉へる願なれば、念々の稱名ごとに往生の業とは成るなり。

この御法語にほだされて居ります。

今が今、この壇上で、息切れ倒れてもよろしい。御用がすんだから本國へ戻るばかりで御座います。急ぐ必要は無いが、御用がすんだのに愚圖々々迷つて居る必要も無い。

私は、電燈の例でよく話します。

今、ここにも電燈が明々と點いてゐますが、私を一ケの電燈に譬へます。するとよく私の頭と見くらべて、成る程とばかり、クス／＼笑ふ人もありますが、この電燈、何ワツトの値打か知りませんが、たしかに茲に輝いて居ります。輝いて居る間は御用がすまぬ證據です。恰かも此の部屋に、御用の在る中は

此の通り電燈が點いて居りますが、講演も終り、あと片づけの御用もすめば、事務所の脇でスキッチを切りなさるでせう。すると部屋が暗くなるやうに、私と云ふものに御用のある間は、此の頭の電燈が力一ぱいに輝いて働いて居りますが、御用がすめば、阿彌陀さまのお手許でスキッチをお切り遊ばしますから、この電燈は消え倒れ、直ぐに阿彌陀さまのお膝元へ皈るばかりで御座います。私は安心して最後のひと息まで御用をさせて頂かうと覺悟して居ります。念佛する者に死の恐怖は無いわけであります。死を恐れて居て何が出来ませう。宗教の問題としては先づ第一に、死の恐怖を除く必要があります。と同時に大切な事は生の歡喜が躍動することであります。重ねて法然上人の死生觀を讃美します。生けらば念佛の功つもあり、死なば淨土に参りなん。とてもかくても此の身には、思ひ煩ふことぞ無し、と思ひぬければ、死生ともに煩ひ無し。



ふさく／＼と稽音庭に暮れし妻
評 木 萬壽 云海

私は此の頃毎日々々楽しい日を送り迎へてゐる。こんな事がそう永くは續くまいものだと恐れをなしてゐる。そして出来得ることなら苦病なしにほつくり死んだらなんぼ幸福であらうと思つてゐる。こんな氣持でこの句を見ると大いに共鳴出来る。此の句は食物についての云つてはゐるが精神的にも恐らく非常に安定を保つてゐるのではないかと想像せられる。作者の心持の卒直に強く表現せられてゐるのも良い。
桐生田 嶋波 光

小商ひするひま／＼の障子貼る
評 此の小商は生活のたしといふよりは小使のたし位の内職的のものであらう。店の前の小さな日向では子供等が色々なことをして遊んでゐることも想像出来る。
東京 船津 思 露

杉苗のあかきが匂ふ霧の中
評 枯色をしてゐる杉苗が霧の中茫と見えてゐる様子が宛も如く思はれるのを「匂ふ」と強く表現したものであらう。
東京 船津 思 露

彼岸花蝶々二つたのしそり
大 阪 萬 順 雄

青嵐の廻廊を行く僧若し
岩 岡 長 岡 白 朝

湯煙の軒より出です秋の雨
大 阪 秋 芳

御佛は此の内にして芙蓉かな
東 京 廣 山 幾 道

風もなく木の葉の落つる秋なれや
關 西 靜 夢

初雪のつもりで見えぬ華頂山
長 野 宮 澤 華 榮

伊那の谷とどころに蕎麥の花
井 原 街 八 木 茂

キラ／＼と牛の涎や秋高し
香 川 日 向 清 月

留守がちな家にも熟れて柿の秋
愛 知 吉 水 清 晃

晩秋を惜しみて柿の二つ三つ
東 京 西 村 泉 花

獨り行く夜半の山路の瀧の音
東 京 西 村 泉 花

別府淺く輪桃舟
白衣の兵床をつらねて盆の月
名古屋 萬 津 新 順

露草の山徑手をととり母と子と
京 都 永 田 七 郎

行く水の平らになり秋の海
近 江 美 船 美 佐 緒

横笛の音こそ幽かに星月夜
名古屋 田 崎 早 男

叢のあれ色見えて蟲の聲
小 樽 平 井 正 念

有難や何を食べてもうまき秋
滋 賀 二 橋 定 道

古沼や蘆の葉越の彼岸花
京 都 愛 發 紅 芽

柿落つる音のきこえて廊長し
島 根 神 一 倫 道

川の面にうつりしみる紅葉かな
久 留 木 江 上 菱 花

秋の水にヤンマの番ひたりをり
東 京 清 水 貞 水

さなきだに病みてわびしも秋の雨
東 京 渡 邊 一 念

蔽ふ草にちゝろの聲や砲光る
京 都 田 中 孝 道

時雨降りて郷のしきりに懐かしき
大 阪 吉 村 秋 穂

谷川の石を叩きて木の實ふる
大 阪 吉 村 秋 穂

今治三木光子
再びのお召し待ちつゝ夜業夫
岐 阜 澤 捨 吉

三日月を見てあがりたる田刈かな
小 樽 中 村 茂 舞

張りかへし障子にうつり菊の花
東 京 府 萩 原 通 孝

みとり女と笑ひ興じて落葉焚く
米 子 宮 本 悠 雄

秋雨の犬戸を掻きて戻り来ぬ
和 歌 山 高 橋 敏 雲

菊の蕾はやもはつれて香りけり
秋 田 鈴 木 白 舟

屋根の南瓜月夜の風に濡れてゐる
大 分 縣 河 野 善 隆

青簾もたけ笑顔の子の這へる
東 京 森 田 法 晃

秋冷のしづもり闇をとさすなる
新 潟 北 條 竹 香

敵兵の跡としもなく蟲の聲
長 崎 池 田 春 柄

なびかせて枯るゝ柳の根のふとき
島 根 石 見 千 翠

竹縁の僧の眼はそくひなたぼこ
官 製 は が き 一 回 二 句 以 内
て 刊 行 所 氏 名 明 記 の 上
に 印 子 一 個 貼 附 併 増 係 者
に 送 る こと

投稿規定

官製はがき一回二句以内
て刊行所氏名明記の上
に印子一個貼附併増係
者に送ること



初冬の日ざし

吉田 絃 二 郎

道元禪師が一杯の水をも大事にして、飲み残りの水を町寧に谷川に流されたといふ物語はいろいろの示唆をあたへる。われ／＼は今まで物を塵末にすることに馴らされてゐた。わたくしたちが子供のころは一粒の米を大切にすることを教へられてゐたが、つひ昨今の人々の生活はそれとは凡そ縁遠い生活であつた。

今度の事變によつて人々は一粒の米の尊いことを相當に教へられてゐるやうだ。これはありがたいことである。

しかしまだ一日生きることのありがたさを知つてゐない。一掬の水も尊く、一粒の米も尊い。まして一日の生存はどれほど尊いものであるか、けだし無量の尊さを持つてゐる。

一日一利那の人間生存のありがたさ尊さを感じつて生きてゆくのが宗教であり、哲人の生活である。人は朝に生きて夕べには死ぬ。朝に生きて正午には死ぬものもある。その短い利那の人生をありがたく生きてゆくことを心がけなければならぬ。

けさわたくしは辛夷の黄葉の落ちてゆくのを見たわたくしは生きてゐることのありがたさを感じた。

けさわたくしは庭の片隅に鶯の笛鳴きを聞いたけさわたくしは庭のあちこちを紅に埋めて散る山茶花を見た。

けさわたくしはつくばひの下のは、路の花を見た。

けさわたくしは裏の竹山の中に雉子鳩の聲を聞いた。



けさわたくしは初雪をいたゞいた秩父あたりの山を見た。

けさわたくしは旅に出た親しい友人からの消息を受け取つた。

けさわたくしは亡くなつた妻の佛前に坐つてしみじみと孤獨の秋を感じた。

わたくしは今朝の恵まれた生活を感じないではれない。たゞ一朝の短い生活の裡にも無量無限のありがたさ尊さはある。

今日の午後わたくしは死ぬることがあるとしても人生の尊さを忘れようとは思はぬ。

無論、死ぬといふことは寂しい。恐ろしいと思ふことすらある。しかし死の刹那が訪れて來たらわたくしは靜かに感謝しつゝ眠りたいと思ふ。

死は一切のものを空無に歸せしむるものであるかも知れない。しかし永久に覺まさせられることもない睡眠、永久に妨げられることもない靜かな眠りであることを考へると死も亦なつかしい。生もうれしい。死も亦なつかしい。

X

十一月二日の午後わたくしは信州の高原を歩いてゐた。

前の日の午後雨が降つたために、その日はめづらしくあたゝかであつた。空には雲もなく、海のやうな蒼空が淺間の山肌をつゝんで、淺間も亦海のやうに碧かつた。わたくしは上衣を脱いで山を歩いてゐた。それでもなほ背には汗が流れて來た。

突然わたくしは鶯の鳴く音を聴いた。わたくしは自分の耳を疑つて、足をとどめた。たしかに鶯の聲である。わたくしは一つの山を越えてさらに一つの山にかゝつてゐた。そこでもまた鶯の聲を聴いた。

茫漠たる冬枯れの信濃の高原に鶯の音を聴くといふことは想像もしないことであつた。

かつて綱島梁川が「神を見たり」と言つた時、當時の人々は「梁川は氣が狂つた」といつて冷笑した。人生到るところに神佛の聲はあらう。たゞわたくしたちは不信にしてなか／＼その境まで詣り得ないのであらう。

X



やがて冬に入らうとするこのごろ西の縁端に坐つて、たゞ獨りしづかに柔かな午後の日ざしをながめてゐるのもありがたい一時である。午後の日ざしは縁端からやがて奥の疊の上へと伸びてゆく。その日ざしをかすめて小鳥の影が横切り、落葉の影がわななくこともある。

午後の日ざしを疊の上に見つめながら、遠い明治時代の東京といふものを懐ひ出したりすることもあり、さらに遠く芭蕉翁時代の江戸といふものを描いて見たりすることもある。

「愚案するに冥途もかくや秋の暮」

いつも今ごろになつて思ひ出さるゝのは芭蕉のこの句である。

わたくしは妻が生きてゐたころ留守番をして、西の縁端に柔かな日ざしをたのしみつゝ歸つて来る妻の足音に聴き耳を立てゝゐたことがあつた。

だから今日もたゞ獨りしづかな初冬の午後の日ざしを浴びて西の縁端にうづくまつてゐると、妻が買ひ物を抱へて歸つて来るやうな氣がしてならぬ。

昔からわたくしと同じ境遇に置かれた人たちは恰

度わたくしと同じことを考へながら初冬の日ざしを浴びたことであらう。

犬の子も五年前と同じやうに縁の直ぐ下に来て戯れてゐる。山茶花や茶の花や鶏頭やうめもどきの眞つ赤な實やのじや青鴉の聲も昔のまゝである。

一切のもの何一つ五年前とは變つてゐない。

五年前、わたくしの門前に聞えた足音もまた屹度一度は立ちかへつて来るにちがひない。

西の縁端に坐つて初冬の日ざしを楽しんでゐるといろいろなことを考へる。

午後一時。柔かな日ざしは縁側からやがて十疊の座敷の取付きまではひつて來た。

午後二時半。柔かな日ざしは十疊の座敷の中央まではひつて來た。やがて十疊の座敷いっぱいひろがつてゆく。

午後四時。柔かな日ざしは十疊の座敷からさらに次ぎの八疊の室まではひつてゆく。あたかも、かつてそこに坐つてゐた人の姿をさがすかのやうに。

十疊の間にも、次の間にも誰れも坐つてはゐない

初冬の日ざしはやがて夕暮れの中に消えて行く。

或る病兵の手紙

(五)

信仰を獲るまで

編輯部

第十四信

お手紙只今入手致しました。今の心境を御傳へしたいと思つて居りました處ですので、何となくピンとくるものがあり、おし頂いて拜讀仕りました。

人一倍勵んでも永い事はないのですから、必死に求めぬく心算です。今思ふに、凡夫のまゝ救はれる有難いお救ひがわからず、私は聖道門の成佛の心境を目指して居つた様な氣が致します。まあ何にしても、これからは念佛を申させて頂く事が出来るやうになりましたので、今後は樂でもあり、張合も出て來ます。

然し先生、自分でも惱み先生にも苦悶を訴

へましたが、今にして思へば、まだ／＼私は若う御座りました。まだ本當の世の中はわかりませんでした。勿論今でもわかりませんが、先生に導かれ色々讀書をして、少しづゝわかつて來る様な氣が致します。何のために生を受け、何の爲に働いて居るかきへ、考へた事もなかつたのです。今迄は、強いて云へば、幸福を得る爲に金を儲ける位だつたでせう。そして一生懸命あくせくして、欲のかたまりになつて働いて、それが反對の結果ばかりでした。ですから病氣で死の宣告を受けた時なども、死ぬのは自分一人だ位に考へて、泣き叫んだわけです。今にして思へば、新聞の三面記事の一つ／＼が皆、自分の明日への運命でした。乗物事故、火災、天災強盜殺人、

皆他人の事ではありませんでした。そして、この世に於て幸福を求めた事が間違ひでした。私達は何の悲しみも知らず、若い元氣にまかせて、思慮なく進んで來て、被害を受けたリ、難事にさしかゝり逆境につきあたると、絶望落膽して全部を投出して悲しみました。愛世の表面だけを見て、一喜一憂して暮す、これでは所詮、一度は大破境が來るべきは當り前でせう。

かの俳人一茶や芭蕉や或は高僧傳などを讀みまして、本當に自然のまゝに、風の如く雲の如く、深い／＼悲しみに徹し切つて暮す。私達の悲しみが水面のさゝ波なら、これらの人々のは、深い青々とした波一つ立たぬ深淵の悲しみでせう。この深い悲しみに徹するには、あらゆる人生苦を紙め、あらゆる悲しみをじつと見つめ、耐え忍んで大自來の鐵則に従ふ。そこに悲しき淋しさを超越した人生の喜びがある、と云ふのですが、寧ろ様な氣がします。私等はまだ本當の淋しき、本當の人生の悲しきはわかりません。ですから、

その本當の悲しみに徹し得るだけの悲しみを
是非味つて見たいものです。

私が陸軍病院當時、死の宣告を受け驚きの餘り、肉親友人等に通知しました。見舞に來るもの見舞狀をくれる者、色々ありました。私の死が絶對と見るや、ハガキ一本くれぬ者も出てきました。慰みが欲しいので、手紙を出しても、返事さへくれぬ者もある。かうなると、矢張り親類肉親だなあと思ひました。餘り腹が立つから、絶交狀をたたきつけてやらうかとさへ思ひましたが、そうせぬ迄も、絶交されてゆかねばならぬ自分、苦笑して止めたものでした。然し今はさう氣にもして居りません。何だかわけもわからず、思つて居る事を書きならべ失禮致しました。熱もや

うやく昨日から下熱致しました。御休心下さい。亦、家内の方も御心配をおかけ致しました。



たが、大變良の様です。

のん氣な我々の手紙に、一々御多忙の中を

御返事頂き、恐れ入ります。暑さに増す折柄、先生の御健在を祈り上げます。末筆で恐れ入りますが只今鈴木さんから如來光明禮拜儀をお届け下さいました。
誠に有難う御座りました。厚く御禮申上ます。

七月九日 五時

酒井廣美拜

中村 先生

第十五信

先生、人生とは生きる事でした。一年でも一月でも一日でも一時間でも一分でも良い。より多く一生懸命に生き通す事でした。それが人類社會の爲であつてもなくても、とに角私は長生に努力し、此の世に生を受け二度とかへらぬ尊い時間を充分味はつて行きたいと思ひます。嘗ては如來様に委した命だ、死ぬ時が來れば死ぬのだと、色々ひどい無茶もしました。然しこれは委したのではなく、自分で殺しつゝあつたのでした。最善をつくして生きなければならなかつたのです。

今の私は、この時局この増産時代から見れば、一面ゴクツブシかも知れませんが、私が生きている事によつて、妻子は生活に安定を得、母親は落膽せず、兄弟達は私の姿を見て張り切つて頑張る様になるでせう。私の生きているとは、全く無意義ではないと思ひます。いやそんなことよりも自分自身に與へられた尊い生を意識せねばならぬと思ひます。

私は人間です。凡夫です。そして、人間であり凡夫である自分を喜びます。悲しみは悲しみ、喜びは喜び、人生のあらゆる感情をそのまゝ味はつて見たいものです。以前の私は、煩惱を斷ち雑念を清めて成佛を目指し、生きたかばねになりたいと思つたのですが、随分無駄な事でした。喜びを喜びとして味ひ、悲しみを悲しみとして憂ひ慕ふ、凡情の内に、人生の眞實、生の尊さをうかゞふ時、私は生きている者の幸福を感じないでは居られない境地が沸いて來ます。本當に念佛の境地が沸いて來ます。有難い事です。

南無阿彌陀佛

もう私は吸に苦しめられ、どんなに呼吸が苦しくてもいいのです。とに角私は生きたいのです。そして見えない位身丈の延びた子供達を見、南進に榮える日本の前途を祝福し、最後の壽命の一秒迄も味つて故郷へ往きたいと思ひます。叔父達二人がラジオを買つて來て据え附けてくれました。靜かに音楽に聞き入る時、そこに人の情、如來の慈悲がしみじみと湧いてきます。あゝ有難い。

南無阿彌陀佛

私は現に、救はれて居る事實に感謝します。合掌致します。

毎度の事で先生には、ちと煩はしい位だと思ひますが、今のこの喜び、この感謝の氣持、この激情を訴へずには居られません。どうぞ御辛抱下さい。然し今迄の様に、一々御讀み捨てに願ひます。

七月十日

酒井 廣美

中村 先生

この感激の中に只今、法然上人の御肖像が鎮仰會から到着しました。何だが七百年の

年月の垣が取りのけられて、上人が來て下さつた様な氣持が致します。先生の御名號の色紙の横にならべてはりました。上人と先生と共に暮す、それ云上の喜びがありませうか。そして私の死を見とゞけて下さるでせう。

南無阿彌陀佛

(齋藤 清畫)

係より

無我夢中になつて道を求め、師にすがつて何んとか救はれようとして、或ひは肉體적인苦しみ、或ひは逆境に悩みながら、ともすれば横にそれきうな心を叱り叱りして、酒井廣美氏はここまで來ました。只今でも中村辨康師の懇切な指導によつて修養に勉めてゐます。従つて同氏の手紙も引き続き澤山にあり、本日に至るまで連絡として續いてゐます。餘り長くなるので、一まづこの邊で打ち切りといたします。



童話

勇敢なピボ

小林

一

待ちかねてゐた赤ちゃんが生まれました。仲よしの七人の兄弟たちが、いよく赤ちゃんに逢へることにになりました。皆兄さんや姉さんになるのですから、墓口の空になる程お土産を買つてお母さんにお禮を云はなくてはなりません。兄弟たちは自分で着物を着替へて、階段の下に集まりました。

七、花と光りと

こんなにも新しい、めづらしいことがつぎ／＼と起つてゐるのに、おしやべりもしないで、静かにしてゐなければならぬのは子供にとつて、ほんとにつらいことです。

ルードキツヒは、すぐにコルネリユー

スの着物を着かへさせ始めました。着物をきかへるとその赤い顔がとても綺麗にみえました。赤ちゃんにあげる美しい小笛についた結び紐を、コルネリユーは直ぐまた頸にかけるのでまだまだ笛を吹いてはいけなさと云ひきかせるのにルードキツヒは太骨折をしました。子供達はそれ／＼日曜日の晴衣をきて現はれたのです。マリーは青い絹の着物を着ま

した。コリーが短く切つた髪をきれいにツヤ／＼とブラシをかけると、マリーがそつと綺麗な着物を頭からかぶせてやりました。それから二人で、アンニーに手傳つてやりましたが、アンニーはお母さんが美しい色彩の縫ひとりをしてくれた白い毛糸の着物をきて、はしやいで飛び廻るので、ビボーは、シッ！静かにしないか！と二度も云つてきかせました。ビボーはとつと仕度が出来てゐたのです。——皆んなの中でビボーほど、はしつこいものはゐません。三人の年上の小供は紺の水兵服を着ました。それからみんな急いで學校靴をきれいな茶色の半靴にはきかへました。それで仕度がすつかり出来上つたわけですから。

それからそろつて庭へ出て、自分たちが日頃たんせいして作つた小さな花園からそれぞれ、美しい花を一つづつ持つて二階のお母さんの部屋へ行きました。

階段を上つてゆくこの綺麗な祭りの行列

を通ひ女中のゲトルードの外誰も見なかつたのは本當に残念でした、それはほんとに奇妙な光景でしたから。赤いこびとのやうなコルネリユースは、勇ましく先頭に立つてゐました。兩手でものを持つてゐるので、小さな足下に特別注意しなければなりませんでした。そして年上の者はいら／＼する氣持を抑へて、ゆつくりと後から續いてゆきました。長い列が二階の廊下一杯になつてしまひました。コルネリユース、アンニー、コリー、ビボー、ルードキツヒ、そしてマリー、ヨストはまだ階段の終りから二番目の段のところに立つてゐました。「コルネリユース！戸をお叩き」とルードキツヒが云ひました。金色の花をもつた小さな拳が扉を叩きました。

「はい」とお父さんの聲が聞えました。そしてまた「お入り」と誰か低い聲が響きました。それがお母さんです！あせつたアンニーが、コルネリユースの後から扉を押してあげて、その愉快なお祭りの行列は部屋の中へ入つてゆきました。しかし、皆んなを幸福さう

な眼で眺めてゐるお母さんのところまでゆかぬうちに、皆んなびつくりして立ちどまつてしまひました。部屋の中はなんてまあ不思議な光景でせう。窓掛けはとつとくに引かれ、柔らかな薄暗いランプが燃え、暖かなバラ色の光が撒がり、そして暖爐の上の小さな搖籠の兩側には、お父さんの書齋からもつてきた美しい古い錫製の燭臺が置いてあり、それに燃えた蠟燭が立つてゐました。

「なんて綺麗」とマリーが云ひました。「ここはなんて綺麗なだらう！」

「まるでお祭りのやうだね」とコリーが云ひました。

「さうだ、ほんとにお祭りの夜のやうだ！」
「もつと先へゆけ！」と他の者が立ち止まつてしまつたので、まだ部屋の中へ入れないでゐるヨストが云ひました。彼は赤ちやんよりも、お母さんにあひたくて、仕様がなかつたのでした。ベットの頭の方にお父さんが立つてゐて、お父さんとお母さんは楽しさうな顔をして皆んなのお祝ひの着物を眺めていらつし

やいました。

「みんなは一時はこの部屋の美しさは先づびっくりさせられたのですが、やがて我にかへつて皆で申合はせてゐたことをまた思ひ出しました。コルネリユースは威張つてお母さんのところへ進みよつて、「ねえ、ねえ」と云ひました。」お母ちゃん、これみんな食べて下さい。」

そして彼は大きな汁氣の多い梨のつたお皿をベットのの上におきました。小さな手に花を高くもちながら一生懸命になつてお母さんの顔に届かうとして爪先き立つて身を延ばしました。「坊や！」とお母さんが云ひました。

さて今度は小さなアンニーの順番です。彼女もその綺麗な赤い林檎をお母さんの前に置いて、小さな口をお母さんの頬につけました。それからコリーはバナナを、ビボーは大きな白い桃を、マリーは美しいメロンを、ルドキツヒはまだ香の高い温室イチゴを順々にお母さんに上げました。そして最後に大きなヨストがその立派な青い葡萄を布團の上に

置いてから、皆と同じやうにお母さんの頬にキスをしました。その時お母さんの頬は涙に濡れておりました。坊や、嬉しいよ……」とお母さんは低い聲でおつしやつて、毛布の下のお母さんの手を探してゐたヨストの手を握りました。

「今度は何をやるつもりだね」とお父さんが云ひますと、お母さんはまた子供たちを見ました。コルネリユースはもう揺籠の側に立つてゐます。「さあ笛を下ろしなさい、コルネちゃん！」とルドキツヒが叫びます。小さな子は眞面目くさつて、頭から紐をとつて、その小笛とタリヤとを可愛い小さな揺籠の上に置きました。それから爪先き立つて、揺籠の帳を引きました。ちびれ毛の頭をふつて、「今日は！ 赤ちゃん！ 今日、おいでよ。コルネちゃんと一緒に遊ぼうよ！」

皆んな腹をかへて笑ひましたが無短なアンニーはもう待ち切れなくなり、コルネリユースをおしのけると毛皮の光つた子熊をいばつて揺籠の端におきました。「あなたの上、赤

ちゃん」と彼女は笑つて云ひました。ところでコリーは手に日向葵をもつて、おつと静かに揺籠の側に立つてゐました。コリーは赤ちゃんをしつかりもつて、抱きあげて、可愛い大きな人形のやうに膝の上に、抱つこしても良いのかどうかとそればかり考へてゐました。さう出来たらなんていふだらう！ コリーが道化人形を絹の紐で揺籠の上に結びつけますと、人形は勝手に自分で廻り始めたのです。

それから彼女は、夢心地で、贈り物の花をおいて、その席を次のビボーに譲りました。ビボーはもう待ち切れなくなつてゐたのです。彼はここでは主役なのです。この小さな妹は彼の世話する子なので、彼は赤ちゃんを今夜から自分の子のつもりでゐるのです！

「よく寝られた？」と彼は質ねました。そして「もうあんなに赤くはないの？ みせてよ！」そして彼は自分の小さな手をゆり籠の縁にかけました。

「赤ちゃん、わかるかい？ ビボーからだよ！」



ビボーは花を足元におきました。
「赤ちやんがものがいへるといいなあ、お母さん」
と彼はいひました。

「それはまだ間がありますよ」と看護婦さんが窓際の椅子から立上つてきて云ひました

「でも我慢しなければね。いゝことを聞かせてあげれば赤ちやんには皆んなわかるのよ。何にも御返事しなくても」

ビボーの小さな手は軽く赤ちやんの小さな口を撫でました。小さな眼は開いてゐます。「おちに嬉しさうにあなたをみますわ。」と看

護婦さんは云ひました「さあ、こんどはあたしよ！」マリーは小さな弟を側に押しやりました。彼女はかうなるのを日中どんなに待ちこがれてゐたことでせう！彼女はお人形と白いダリヤの花を置きました。生れた許りの赤ちやんにもきつとよく見えたに違ひありません。

コルネリユースが生れたのは学校のお休みの間だつたので、誰も家にゐませんでした。皆が彼をはじめ見た時はもう三週間もたつてゐました。こんな生れたばかりの赤ちやんは初めてです。

皆は一心にゆり籠の中を覗き込みました。赤ちやんは二つの大きな青い眼、絹のやうなうすいブロンドの髪、綺麗な人形のやうな頸、小さな口、……「あらッ」とマリーが突然叫びました。「赤ちやんにもう小さな爪があるのね！お母さん」彼は自分の手でその小さな、とても小さな手を握つて撫でました。赤ちやんは小さな手でその指をつかみま

した。

「赤ちゃんが私をつかんだのよ。お母さん！」とマリーは大得意で叫びました。赤ちゃんの小つちやい指、もう動かせるのね！」

ルードキツビが彼女を後に押のけました。

順番だからです。二人の大きな男の子は並んで小さなゆり籠の側に立ちました。ものも云はず彼等はその贈物、鈴の環、白い吊りポールと花とを置いて、白い枕にちよこんとつてゐる小さい顔をおつと見つめるのでした。

ヨストはぎごちない格好でのぞきこんでゐるのです。彼も一度はこんな小さい頭、小さな足をもつてゐたんだらうか？

「赤ちゃんの足をもう一度みていい、看護婦さん？」

と聞きました。看護婦さんは笑ひながら花とおもちやで一ぱいになった布團を一寸もち上げました。皆んなは眼をこらして、すつかり

びつくりしたやうに小さい薔薇色の足をじつと見ました。足はかすかに動いてゐました。

「赤ちゃんの足に爪がある！お父さん！赤ちゃんにも爪があるよ！いくつあるの？」

とコリーが、突然お父さんの方を向いて云ひました。

「足の爪！丁度お前とおんなじだけさ。」

みんなは、この新しい妹が、この上なく利巧で愛らしく、綺麗だといふことに、一致しました。看護婦さんは又その小さな足を

かくしてしまひました。すると赤ちゃんは周りを見まはしました。日曜に皆さん學校がなかつたら、私が赤ちゃんにお湯を用はせる

時、皆んなでいらつしやい。そうしたら又よく赤ちゃんがみられますよ」

「僕その時お手傳ひしていい？」

とビボーがききました。看護婦さんはうなづいて、何か小さな聲で彼の耳にさゝやきました。すばしつこい彼は部屋から飛んで出ました。

「ビボーちゃんは赤ちゃんのために最初のお世話をするのよ」と看護婦さんが説明するのでした。「ビボーちゃんはお花を入れる壺をとりに行きましたの」

彼女はお母さんのベツトから果物を取りお

ろしてそれを丁寧に化粧臺の上の錫のお皿の上にならべました。そこへビボーがもどつてきました。皆んなは立つて、看護婦さんが大きな日向葵を高い瓶にさし、そのほかの花は青い陶器の壺にさし込んで、燈りのついてゐる燭臺の側に置くのをじつと見守つてゐました。

「これで赤ちゃんの兩側には光と花がありますね。これ以上いゝことはないでせう」と云ふのでした。

「それから、まだ一つ贈物」ビボーは思ひ切つて、ポケットから引出したのです。何んでせう？みんながみました。それはビボーの大切にしていた赤い赤い白鳥で、それが大好きだつたので、いつもポケットの中に入れてゐて寝る時も並んで一緒にねるし、お湯に入る時にはいつも一緒に泳ぎ廻つてゐたのです。ビボーはそれをどうしようと云ふのでせう？彼はそれをもう四年越しもつてゐて、そんなにも好きなおもちやは他にはなかつたのです。ビボーは時によると、それを友達

やうにしてお喋舌をしてゐました。そんなに
も大事な人形をどうしようといふのでせう？
「さあ、赤ちやん」と彼はひきましたがその
聲がかすかにふるえてゐるのがわかります。
「これも君のだよ。これでビボーは獨りぼつ
ち。大事に持つてね」
搖籠の中で赤ちやんはぶく／＼と云ふ聲を
二度、三度出しました。
「何んだかわかる？」と看護婦さんがたづね
ました。ビボーは頭を振りました。
「私にはよくわかるのよ、よく小さな赤ちや
んのお相手をしてゐますのでよく解りますす
わ。赤ちやんのいふのは、これは大變氣に入
りました、あなた方は皆んな立派です、花や
贈り物はみんな綺麗だと思ひます、中でも一
番綺麗なのは小さな白鳥です、つて」と看護
婦さんが赤ちやんに代つて答へてくれまし
た。

「さうなんだよ」とお父さんがおつしやいま
した。ヨストはお母さんのベットの側の椅子
に靜かに坐はつてゐましたが、

「もう私達ゆかなけれ
ばいけないでせう？
又寝なければいけない
でせう？」と彼は騒ぎ
ました。お母さんはう
なづいて
「さうよ、もう少し靜
かに夢を見ながら眠り
たいの」と云ひまし
た。

「皆んな銘々又列を作る。整列！」とお父さ
ん。そうして一チ——二ツ——三ッ、前へ進
め！後で御飯になるまで靜かにしてゐる。
解つたかい？」

そのお祭の行列が出てゆきますと、寢室は
すっかり靜かになりました。

「良かったですねえ」

と看護婦さんはお母さんに又布團をかけなが
らひみました。

「えゝ、本當によござんした」

陸海軍病院慰問淨土

寄附者芳名 (敬稱略)

二圓四十錢	鹿兒島市山下町	淺田清八郎
五圓	平市九品寺	遠藤心光
二圓四十錢	福岡縣朝倉郡宮野村	淨福寺
一圓	大阪府北河内郡友呂岐村大字郡	南貞次
一圓二十錢	茨城縣多賀郡華川村芳ノ目鑽	川波舜民

淨き友會十二月例會案内

一、日時 十二月廿一日午後六時ヨリ

一、場所 本郷區東片町七八(白山上)

橋本樂榮方(電話小石川四九七六)

一、講話 大乘起信論 中村辨康先生

(來會歡迎) 淨き友の會幹事

「興亞觀音堂」天井の龍

英靈に奉仕した……

……堂本印象畫伯の美學

編輯部

して盛儀を極めた。

今次事變最初の中支方面最高指揮官松井石根大將が大陸の野に興亞の礎石となつて散つた幾多忠勇の英靈と、蔣政權に誤られたるとはいへ勇戦して斃れた中國軍人の靈を慰め、永く回向をするために「興亞觀音」を建立したのは有名な話である。

熱海伊豆山頂に熱田神宮の檜の残木を用ひて立派な觀音堂を建立し、扁額には朝香宮様の御染筆を拜戴して、昨年二月廿四日本會副總裁大島徹水大僧正により開眼式が修された。開眼式の當日には朝香宮様を初め奉り、陸軍諸將星、名士、遺族等の方々が多數參列

と快諾してくれた。

それから一年が経つた。大島大僧正は、その後この話が何うなつたか何時も念頭を去らず案じてゐたので、執筆の中途でよいから是非一度拜見したいものだと堂本畫伯にたのんだが、何うしても完成してからにして欲しいといふので、結局案じるだけでそのまゝになつてゐた。斯くして一年半の今年の夏になつて、やうやく堂本畫伯から完成した由の知らせがあつた。

「熱海興亞觀音堂天井常住の龍」として堂本畫伯の勞作だけに、さすがは見事な出来栄であつた。これを見て松井大將も非常に喜んだ。大島大僧正も勿論嬉しかつた。松井大將は早速に大將作の詩を揮毫した色紙一枚を畫伯に贈つた。

堂本畫伯のこれだけの大作であるし、畫料は當然相當高價なものであるに違ひはなかつた。しかし畫伯は、大島大僧正から執筆を依頼された時に「事變陣歿英靈」のために描い



たのであり、また松井大將の興亜觀音建立が幾多忠勇な英靈と戦場に斃れた中國軍人の靈をも慰め永く同向するためであるといふ趣旨に對して滿腔の敬意を表してゐたので、執筆を承諾したのである。だから最初から畫料等は全く念頭になく、諸精靈を追善するの真心だけで雄渾をふるはれたのである。

また一方、大島大僧正としては興亜觀音堂に奉納させるつもりで執筆を依頼したわけではないが畫伯の飽くまでも奉仕の誠を盡してくれたその態度にこめた氣持に深い感謝の意を表し、見事な龍

を眺めては感激のつきるところを知らなかつた。そこで松井大將とも相談の結果、畫伯の奉仕を心よく受け入れることゝなつた。

かくて堂本畫伯によつて魂を吹きこまれたこの龍は伊豆山上にあつて、四方十方を睥睨し、興亜觀音を末長くまもることになつたわけである。(寫眞は堂本畫伯筆天井の龍)

飲めば益々

元氣旺盛

無(にんにく粉末)コナワサビ
臭(固形にんにく)そてつ粉末

子供の疳蟲によくさく

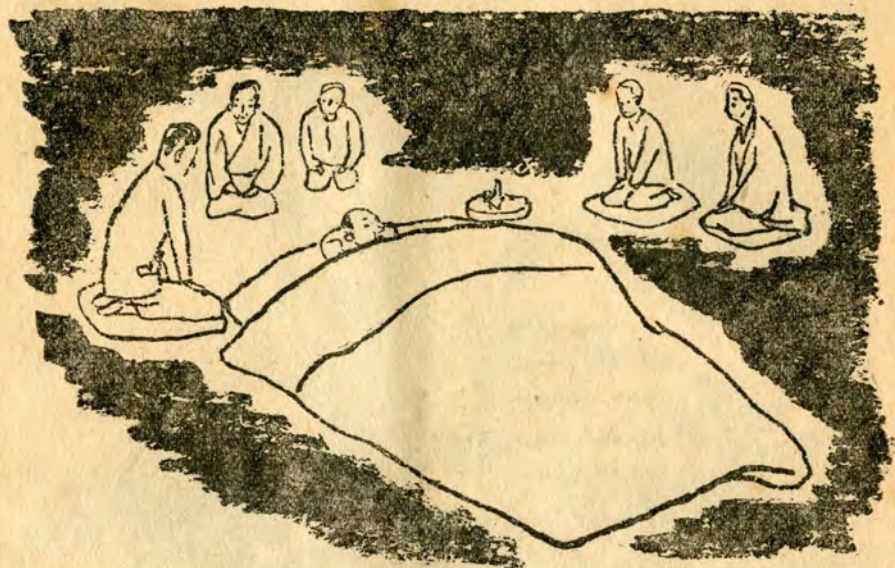
孫太郎蟲あります

特約店大募集

静岡市上香谷町

神谷昌孝

電話 二八六三番
振替東京一四六五一番



先師を語る……………8……………

渡邊海旭先生

増谷文雄

わたくしどもにとつては、渡邊海旭先生の人格に對する尊敬は、いはば全人格的のものでありますが、一般の人々が先生に對しては特に感銘し尊敬するに至つた理由の中には、先生が生涯獨身であられたといふことが屢まげられてをります。

先生のひろい交友範圍の中には、頭山滿翁のごとき右翼の人々がかなり數多かつたやうですが、數年前わたくしは、ふとした機會に、新宿中村屋の主人相馬愛藏翁から、先生と頭山翁との交友の端端のことを聞くことが出來ました。

それは誰の死んだ折のことであつたか、多分アタールといふ印度の志士が毒死した時であつたかと思ふが、ともかく告別式を終つて、遺骸の同伴をして多摩に向ふ自動車に、先生と頭山翁と相馬翁とが乗り合せてゐました。頭山翁は

御存じのやうに無口な方ではありますが、ふと口を切つて、先生にむかつて、

「和尚さんはお子さんはいくつたりありまするか。」

と質ねました。實に變な時に變なことを質ねたものであります。それが頭山翁の質問であつてみると、皮肉でも何でもないことが解ります。

「僕には何にもありません。」

先生が例の早口でさう答へると、頭山翁は口の中で「フーム」とか何とか、解つたのか解らぬのか解らないやうな聲を出してゐました。それを相馬翁が横から、

「和尚さんは獨身ぢやから。」

と註釋を加へると、頭山翁はまるで意外なことを聞くものごとく、

「ほう、和尚さんはおひとりか。」

と感嘆してゐました。それに對して、先生は例のごとく、僕は女



房をもらう資格がないからと、何でもないうやうに答へられてをりましたが、頭山翁が「この和尚は……」と先生にほれ込んだ動機は、このほんの短かい會話のうちにあつたのでした。

二

渡邊先生が生涯獨身の決心をされたのは、随分お若いころからのことであつたと思はれます。

先生がながい獨逸留學に旅立たれたのは、明治三十三年（二十九歲）の五月のことであつたが、その出發に際して先生は、同志たちの雜誌「新佛教」の費用にと、洋行費の中から若干の金子を寄附せられました。だがその頃の先生は金看板つきの貧僧ではあつたし、それに切り詰

めた學費で洋行する留學生のことではあるので、「新佛教」の同志たちは、この寄附は歸朝してから貰ふことにしようとして辭退せんとしました。その時先生は、

「僕は生涯結婚しないから、どんな簡易生活でもできるんだ。仕事に金を出すことは他の者よりは楽なんだ。」

と言つた、やつぱり客附金をのこして出發されたのですが、このせりふの中にも、先生が早くから生涯不犯の生活を覺悟してをられたことが知られます。

先生は獨逸に隨分ながくおられ、十二年ぶりで歸朝されたのですが、歸朝すると、しきりと先生に妻帯をすすめた人々がありました。人々は、先生の獨身主義がそれほど根底あるものとは思はれなかつたのでせう。だが、先生の獨身主義は一時の感傷から來たものなどとは違つて、すこしのゆるぎも見せなかつたやうです。

高島米峰翁のごときも、その頃先生に妻帯をすすめたものの一人でありましたが、米峰翁はその時の感想をつぎのやうに漏らし記してをります。

十二年ぶりで獨逸から歸つて來て、僕はいろいろの點から考へて、彼の獨身主義に相當の危險あるものと思つたから、先づ第一に結婚しないかと警告したものであつた。しかるに彼が言ふのに、結婚はしない、少くとも寺院の中で生活してゐる間は斷じてしない。と彼は極めて嚴肅なおももちで斷つた。僕はその時かきり再び結婚の問題を提出することをしなかつたのである。

寺院の生活をしてゐる限り結婚しないと云ふ一言の中には、すこぶる多量の意味が含蓄されてゐると思ふ。けれども彼は、それ

を凡ての僧侶に強要しない。

この米峰翁の言葉にある通り、渡邊先生の獨身生活は、佛僧である限りは斷じて結婚しないといふ最も明白なる理由によるものでありましたし、それは佛戒の定むるところによるものであり、且つ佛僧そのものの本質にふれる問題でありましたが、しかし先生は、滅多にその理由を正面きつて述べたこともありませんし、またこれを世のつねの僧に強要しようとしたことはありません。

人々はしばしば先生にその獨身の理由をたづねました。すると先生はよく、

「貧乏と勞働のために、結婚する暇と徳とがなかつたのです。僕は人間としては失敗者です。」

などと答へられたこともありましたが、そのときはいつもをいくたびか直接に聞いたことがありますが、そのときはいつも

「女房を貰ふ金があつたら、それで學生をやしなふんだ。」と言つてをられたことを覺へてをります。僧侶の獨身生活に就ては、私なんかは今や何を語る資格もないのですが、これは言ふまでもなく佛の戒律の定むるところでありますから、これを實行してをられた先生にその理由を質ねることは、まさに愚の骨頂であつたわけです。それで先生も、眞正面から開き直つて答へられることは滅多になく、多くを顧みて他を言はれた譯であらうかと察する次第であります。

しかも先生は、御自身で斷乎として佛制の獨身生活をつづけてをられながら、これを決して他の僧にすすめたこともなく、また他の僧の結婚生活に對して少しも眉をひそめるやうなこともなく、むしろ



る進んで、僧侶の結婚の媒約をなされ、僧侶が一般人の範となることとき家庭生活を営まんことを希望せられてをられました。この海のごとく瀬川のごとく高かつた先生の態度は、なかなか理解しがたいものでありますが、そこには先生の時代に對する明識と佛制に對する忠誠とから生れた一個の新歩的な主張が存してゐたことを知るのであります。

三

渡邊先生は深川の西光寺の住職をされてをられました。先生はこの寺をして新しい時代に即した新律院たらしめんとされてをられたのだと思ひます。

西光寺は關東大震災の時に焼けて、現在の寺宇はいはば假建築であります。それが、それでも相當に大きくひろい寺であります。そこに先生の御在世中には、いつも十人前後の學生が先生の御世話をして住んでゐました。それは現在の寺院の常態からいふと、かなり異つた風景でありました。

男世帯で、學生がたくさんゐて、たべ物にも不自由してゐることを知つて、檀家の人々はいろいろと食物をこの寺に運んだやうでありました。芋を一俵とどけた人もあります。大根を一ざるかへて來た人もあります。大きな菓子折は何より居候たちの歓迎するところであつたでせう。だが、ある時大きな籠に一ぱいどぜうを

とどけられた時には、先生もちよつと當惑せざるを得ませんでした。

「今日は弱つたですよ。生きたどぜうをこんなに貰つたですよ。」
手つきで大きな籠の大きさを示しながら、先生は實にうれしさうな顔をして話してをられました。その姿を私は、今でも思ひ浮べることが出来るやうです。

「若いものたちは、どぜう汁にしようといふんだが、どうも、びちびちした奴を殺すわけにも行かないし、若いものには氣の毒だつたが、たうとう放生會をやりました。」

先生のうれしさうな顔は、きつとその放生會をやつたことが嬉しかったのでせうが、みすみす大川の橋の上からどぜうを放り込まなくてはならなかつた居候諸君の残念さうな顔もまた微笑まれるではありませんか。

ところで、この寺の居候の中に、時折、紅毛碧眼の大入道も見えることがあります。それは獨逸の巴利語學者のニヤナ・チロカ博士、その弟子のワツボー、露西亞の佛教學者ローゼンベルグなどといふ手合



であつて、みんなはるばる歐洲から渡邊先生をたよつてきては、全く兄弟のやうにして西光寺に長逗留をしてゐたのです。

先生の世話すきは有名なもので、獨逸に留學中には「私設大使」といふアダ名さへあつて、そのころ獨逸に留學したものは大抵みな先生の世話になつたものださうですが、歸朝後は、今度は逆に、むかうから盛んに先生を頼つて西光寺にやつて來たのです。そのために、誰が言ひ出したものか、西光寺のことを國際テンブルなどといふものもありました。

この國際テンブルには、前記のやうな歐洲の佛教學者のほか、印度の志士や亡命者もやつてきました。また支那や滿洲の耆宿學匠もすくなくらずこの西光寺の門を叩きました。來るものは誰でも拒まずお世話するのが先生の常でありましたが、たゞ一度、エルゼ・ブツフォオルツといふ婦人がはるばる獨逸からやつて來て、先生の弟子にしてくれとのことであつたが、これだけ先生もついに頭として許されなかつた。それは、こ

の西光寺をしてどこまでも律院たらしめんとする先生の念願があるからであつたと思はれます。

四

先生が最後の病床につかれた時、先生の病状を憂へた人々は、病床に看護婦をつけたと思つたが、先生はそれをどうしても許されませんでした。

「むかしの僧侶には、病院もなかつた、看護婦もなかつた。」

さう言つて先生は、人々の申し出を強硬に拒まれました。さう言はれて見れば、佛祖釋尊は沙羅の並木の下で弟子たちに見とられながら涅槃に入られたのだし、先生の師事してをられた行誡上人は、病床に『僧語』一巻を口述し、病をおして祖忌を修了して、奄然として寂されたと聞くのです。それに西光寺はどこまでも律院であらねばならぬことを思へば、先生が看護婦を拒まれた心事が、朗然として解るやうに思はれます。

看護婦のゐない病床と、男ばかりの世帯の臺所を世話なされるため、他家にとついでをられる二人の妹御がつめかけてをられたが



生の心事をよく御承知の妹御たちは、病状が憂へられて自宅までは歸りきらないで、近所に宿泊されたこともあつたさうですが、それでも決して夜の西光寺にとどまることはなかつたのです。

先生は人にもとむるところは決して嚴でなかつた。しかし、自己に求むるところは決して寛ではなかつた。自分はどこまでも律院としての生涯を完ふし、その住寺はどこまでも律院としての面目をたもちたいと思つてをられた。そのことを先生は人に對して語られなかつた。しかし先生の行誡は、もつとも雄辯にそれを語つてゐたのであります。

その妹御たちも、午後八時になると、後事を居候諸君に托して、西光寺を辭し去らざるを得ませんでした。先生の病篤きに及んでは、どんなにか後ろ髪をひかれる思ひがしたことでありませう。しかし、たとへ妹御であらうとも、女人の西光寺に宿泊すること、先生の斷じて許されざるところであつて、その先

ましが 廻覧板



常盤花あり 川口久

どうです。見合とは、嬉しいトナリ組ですわいな。



噴火

國民皆勞 をぎ原賢次

「ボク アチタカラ トウチヤンノ コ

「ウヘツ」



隣組防空相談會

山崎 善一

「組長百キロ爆弾と言ふのはどの位です？」
「シーその話は家内が向ふへ行つてからだ」

感 謝 意 注 意
 「こんなところへゴロ寝して風邪を引く
 といけないからマスクかいちやつたよ
 ……」



大 學 卒 業 期 満 上
 山 崎 善 一
 勞 務 動 員 に つ く 生 徒 「ハ、ア あんな 風
 に や る ん だ ナ」

總 決 算
 川 口 久
 「おい、ビク／＼するなよ。今年の決
 算は國の寶で大黒字だぞ、ホラ、三つ
 兒」



久 久

淨土往生と「我」の不滅

(問)

佛教で無我即ち我といふものは無いと説き、私共の「我」と思つて居るものは「業」であると云ふ。

本来「無我」ならば死生は浪の起伏に過ぎなく、風がやんで本體の水にかへれば我と他とか云ふ區別はありませんまい。然るに死と共に極樂往生をさせて頂く佛の慈悲があり難いと云つて喜ぶのは、自分が極樂まで連續することを前提として居なければなりませんが、我のない場合喜ぶと云ふ感情もない筈です。經典の中には到るところ「我」なる衆生が彼世に連續する有様が説かれ、大無量壽經には

「國中の人天」とありますがこの人天とは誰のことでしょうか。平等の中に差別ある淨土の聖衆群ではないでしょうか。阿彌陀經には「其人無量無邊」とも「諸上善人俱會一處」ともあつて往生者の差別があり個人的色彩が濃厚であります。然るに「我」がなく心が霧散し残るものは業力であるとする建前から見ればこの業力が往生し「聖衆」となるやうでもあります。

或はこの心の本體は眞如とした佛性とか法性とか云ふものつまりは靈魂が残る譯ではありませんか。一方では「無我」とも云ひ他方で「極樂往生」と云ふのは矛盾です。

此の點無我と云ふことと淨土聖衆との區別は何うのですか御教示願ひます。私達の業は信心の功德に依り彌陀の本願力に依り無始以來積つて居る深重の惡業煩惱も打ち消して頂くので、其處には何も残らぬ道

(答)

理ですが、淨土には一體何が往生するのでせうか。無我とか無靈魂とか云ふ一面に、淨土往生の人天等の差別我を認めるのは甚だ矛盾のやうに思ひます、此の邊のことを詳しく御回答願ひます。(大阪市・坂田正雪)

「無我」と云ふことは差別がなくなたと云ふことではありません。單なる平等、單なる差別は惡平等であり惡差別です。あなたはあなたの頭の中だけで、ご自分の知つて居らるる概念だけで批判しようとなさつたので矛盾をお感じになつたのではないでせうか。

「無我」と云ふのは相對的な差別觀(則ち平等に對する差別、差別に對する平等と云ふやうな相對觀)を無くした無私の考へになつたことです。隨つて私利私慾的な生活が清算された状態です。

佛教で言ふ「常樂我淨」の四個の概念には二種類あつて、私達凡夫の考へて居る「常樂我淨」は四顛倒心と云つて根本的に大間違ひの元だと言つて居ります。之に反して菩薩の



有する「常樂我淨」は眞實なものであり、涅槃の境界であるとして居ります。

私達の考へて居る「常」は一切を存在的に見、かたまりとして見て居るものでありますから、謂ゆる「常見」になつたり「斷見」になつたりするので「離邊處中」の生活することが出来ません。元來私達人間を初め一切の諸現象は諸縁の集りであつて「常恒不變」のもの即ち「我」と考へらるべき「不滅」のものはないのに、それを「不滅」なり「不變」なりと思つて居るその「常見」が、常に私達の生活の基礎となつて居り、常に生活をおびやかし、常に生活に苦惱あらしめて居るのです。そしてこの常見は「我」を固成せしめ「我」は「常恒なり獨一なり主宰するものなり」と固執せしめ、續いて我は淨きものなり樂を享受すべきものなりと云ふやうに思ひ込ませて居るので

す「無我」の理を概念的に知つて居たとて現實的な私達の生活事實を何うしようもないのです。我執に捉はれ煩惱妄念に縛られて居る私達の何處に「無我生活」があり得るでせう。事實「我執生活」をして苦惱から脱却することが出来ない此の事實を何うするのでせう。死に依つたとてこの「我執妄念」から脱却出来る筈はありません。曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して生死の濁流から脱却出来ない此の現實の事實は、それを意識する意識しないに拘らず清算することは出来ないのです。何故ならば現實の私達の生活事實が現にそれから脱却して居ないからです。元と

く「無我であつたものが因縁和合して「我」を形成したのでなく無始已來「我」の中に終始し「苦」の中にあへぎ、濁流の中にもがいて居るのであつて、死に依つてのみでは解體することが出来ないのです。私達は自分を「常樂我淨」なるものと思ひ込んで居ります。が、事實は「無常苦無我不淨」であつて「眞常、眞樂、眞我、眞淨」の何たるかを知らず、またそれになり得ることも出来ないのです。

是の故に聲聞緣覺等の聖者達は「我執」から脱却せんとして或は「無念」を修練し「因緣所生」を習學しましたけれども、それらは皆な個人解脱の建前を取る爲に不完全をまぬかれず、遂に他と共に正しく生きんとする「淨土」の建設に進進する菩薩行に努力したのでした。それを菩薩と申しますことは御承知の通りです。そしてその理想とする淨土こそは、眞の淨き世界であり、苦樂を超えた眞樂の涅槃界であり、天地の大生命をそのまゝに、その大生命に隨順する不滅の世界であり、隨つて相對的な意識から脱けた唯一絕對の世界であるから、そこにも眞實の眞實我淨があるとして居ります。そしてそれは私達のやうな一から十まで存在觀の上に立つて生活して居る者共に取つては容易に瞭解すること出来ない世界ですから、それを理解しようとするには先づその哲理を學んで自分の理解力を高めるばかりでなく、生活も出来るだけ



正しい規準に則つて體驗の數々を経、また暫く差別的な思慮から脱け出る爲に無念無相無願の三昧を習得し、更らに布施、辱忍等の慈悲行を以て自ら進んで自我の擡頭を克服しようと、以上のやうな六波羅蜜、戒定慧の生活を打ち建てたのであります。それが則ち聖道門の依つて開かれた理由であります。

然るに淨土門では直ちに大生命に歸順歸一する「信」と「念」との方法を取つたのであります。菩薩が自ら「淨土」を建設しようとしても到底完全を期せられるものではありません。自ら大生命に歸一しようとする自己中心の方法では煩惱障を克服しても所知障は塵沙の如く無數であるから餘程「我執」が取れたやうでも、深刻な問題に觸れると矢張り「我」の觀念が出て來ます。この故に容易に完全に歸一した「無我」状態にはなり得な

いのですけれども、念佛の信に養はれ行けば、わが自分を委せ切るのでから、事實上の我執は取れないにしてもその「我執」までも如來様へ委せてしまふやうにする爲に、不思議に完全に歸一出來るのです。そしてその世界が即ち阿彌陀(無量壽・大生命)の淨土であり、阿彌陀(無量光・天地一杯の中なる「生」の状態なのです。これは敢へて死後のみには限らないと思ひます。信に依る變易生死に依つて往生淨土たり得るものと思ひます。法然上人の「一念に一度の往生、念々毎の往生」と云はれたのはその意味であります。然し我執を克服して居るものでないから、それが私達の意識の上に確然としないのです。それで分段生死の肉體捨離の瞬間に於いてハッキリしたものを感知するのであります。そしてその次の瞬間に於て「無生の生」を證得すると云はれます。ですから往生してからの喜びとは違ひます。之は往生人の理想とする上品上生の姿であります。誰が往生するのであるまいせん。迷我が死んで眞我が

往き生れるのです。

こんな譯ですから「無我」と云ふことは「我」が有るとか無いとか云ふ存在的問題ではなくして「我執」即ち「存在觀」の上にのみ物事を見て行かうとする私達の「妄念」が打破された状態を指して居るのですから、あなたの御質問の要旨は正しくない理論の上に基礎を置いてそれから來る矛盾を解決しようとして居られるものであつて、その矛盾は御自分でお作りになつた矛盾に過ぎないので

最初に申しましたやうに「無我」は惡平等の上に立つものではありません。隨つて「無我」と云つても現に生きて居るこの五尺の體の「私」がなくなつたわけではありません。ですから、この五尺のからだの私を永遠不變の眞我だと思つて居る迷妄の觀念を打破して、兎もすればイヤ二六時中起りどほしに起つて居る「我觀念」及びそれから來る「我所有觀念」を訂正することが「無我」と云ふことなのです。それで差別即平等、平等即差別



と云ふことが出来るのです。それをあなたは存在的なものとして御考へになつて居るので「人天」があるのはおかしいとか「諸上善人俱會一處」は個人我だとか、勝手な解釋を下して居るのであらうと思ひます。

元來「現象」なるものは苦樂淨穢有無等の觀念を離れた單なる現象そのものであります。それをきたないとか美しいとか苦しいとか又は有るの無いのと云つて居るのは私達の方の主観だけであつて、現象それ自體の問題ではありません。事は事であり物は物であつて、それを有ると見、無いと見るのは、こちらの勝手な意識です。急いで居る時には、見れども見えない場合が往々にしてあるではありませんか。

たゞこちらの感覺と觀念とに依つて存在非存在を決して居るだけのことで、つまりこの自然の現象なるものを私達は固定存在

と見て色々な考へを起して居るが、それはこちらの妄念から見たものであつて、向ふはそんなことには顧着して居りません。顧着して居るのは私達の妄念だけなのです。あなたは現象を波の起伏に譬へられました。波は水を離れてはあり得ません。波がなくなつても水はなくなりませんやうに、五尺のからだを波として「我」と思ひ込んで居たのが、五尺のからだの波がなくなつたからと云つて、本來の水がなくなつたと云ふ譯には行きますまい。譬へが水だから簡単に考へられますが、私達の波は水の波のやうにすぐには消えませんが、業の風が吹き通しに吹いて居るので、本體は眞如法性の水であつても業風がやまないから、私達は常に生死に流轉して居るのであつて、死んだからと云つてすぐ眞如法性の無風状態にはなり

病古代療法

頭の悪い方へ警告！

頭がよく痛む。物忘れして困る。よく眠れない。めまひや耳鳴りがする。血脈も高い。便秘がちだ。短氣でおこり易くなつた。肩がこる。高い處へ登れない。

と言ふやうな方は、神農の昔から幾千年、經驗に練をつみ、これらに間違ひなしと確證を得た皇漢の古代療法秘傳藥「完腦丸」を服用して下さい。一週り分を服まれたとては目にはハッキリ致します。

腦の古代療法完腦丸説明書無代進呈

本家 大阪市港區市岡警察分局五・電話西一 九八〇番・振替大阪一〇・〇八八〇番 久本 茂

得ないので。また假に無風状態になり得たとしても、何にも残らない筈はありません。眞如法性の水が残つて居るではありませんか。

一體此の水波の譬へは起信論に出て居ることで、説明上には簡単に便利ですが、譬へとしては、まずいもので不完全ですから、古來兎角の批難があるのです。元來こんな譬などを起信論が引用したからいけないので、こんな譬へでは眞實をつたへることが出来ないのです。つまり存在觀の見方に墮ち易いからです。是の故に無我だから何もないと見て居るのも存在觀であり。(以下五五頁へ續く)



北は寒風吹きすさぶ荒野にあつて、南は灼熱の密林の中で、わが皇軍はいよいよその精華を發揮してゐる。皇軍の向ふところ常に敵は萎伏して、その後は直ちに和協樂土を現出する。かうして日に夜をついで、たゆみなく東亞共榮圈が建設されてゆく。

る。十月十三日から十日の間、東京の街には何處に行つても輝く遺族章で一ぱいであつた。線々とふりそぐ秋の陽を浴びて私は市電を待つ間に、大空を仰ぎながら、フト何處かの慰靈祭で聞いたことのある言葉の「男子の本懐これより過ぎたるはなし」といふ一節を

靖國の……

上京遺族を訪問

畫と文山崎生

しかしこの赫々たる武勳のかけに、戦場の華と散つた勇士の數も多いのである。こうしてこの秋、忠魂永へに輝く護國の神として靖國神社には新に一萬五千十三柱が合祀されたのである。この名譽ある大祭に參列のため全國から集つた遺族の方がザツト三萬人である。

思ひ出し、口にして云つてみた。大君の御爲に、お國のために一命を捧げ得た勇士の本懐や英靈を迎へて更に護國の神に合祀せられた遺族の喜びは、それこそ秋の日本晴のやうな氣持であらう。

そこそこで何度も見えてゐた「英靈に感謝、遺族に敬意」のポスターが、この日ばかりは全く新しい氣持で讀み返される。各種の婦人團體の人達が、東京に不案内な一群の遺族を電車の乗り降りや道案内に懇切にお世話してゐる風景は、またとない美しいものであつた。心に描いて待ちに待つた今日の九段での對面を無事に終つて、遺族達は東京見物やその他で可成り忙しうであつた。そしていよいよ

上離京をするといふ前夜、私はわざと夕食後を狙つて本郷のS會館にと、その宿舎を訪れた。

會館はホテルとアパートを兼ねた白壁の二階建てである。S會館には十六名の遺族が分宿してゐた。私は十六名も泊つてゐると聞いて一寸不思議に思つたので、早速宿の主人に尋ねてみたら、

「ナニ、心配することはありませんヨ、今まで住んでゐた人達にはしばらく近所の家を間借してもらひました。英靈の遺族の方のためですから、その人達も氣持ちよく住んでゐた部屋を一時空けてくれました。」

と、こともなげに説明してくれた。この位のことは當然なかも知れないが、それでも私はS會館や近所の人々の美しい心意氣に急に周囲が明るくでもなつたやうな朗らかな氣持になつた。

やがて主人が私を案内してくれた二階の一室では丁度一人の老婆と三人の男の人とが食事中のところであつた。一番隅に座つてゐた

男の人が、「サア、どうぞこちらへ」と座布團を出して、私を招じてくれた。

陽にやけて丈夫さうな顔に、太い皺が幾線もきざまれてゐる。お互同志で遠慮したり、飾つたりすることのないこの人達は大きな聲で話し合ひ、そして時々ま腹の底からでも出

櫻井氏の
奥さん



すやうな笑ひ聲をたててゐた。私は部屋に入るまで慰問をするといふ氣持を持つてゐたことが、まるで當らなかつたことを知つた。私は横にゐる老婆の顔にさへ底力のあるたくましさを感じた。わが子を靖國の神として祀られた感激に顔をほてらしてこそゐるが、悲し

み等の毛頭見えない顔であつた。これこそ皇軍兵士の父の顔であり母の顔であると思つた。

この人達の年長者——私に話をして下さつた方——の名は櫻井由五郎さんと云ひ、群馬縣新田郡木崎町大字下江田村の人である。今度合祀された名譽の勇士は櫻井さんの長男である。

「サウ、今生きてゐれば二十七です。兄弟は全部で九人ゐました。一人息子さへなくす人が澤山にゐますもの、私等はそれを思へば何んでもありません。」

と靜かに笑ひながら語る櫻井さんの顔は、英靈の親である誇りが見えてゐた。しかし死んだ息子の歳を數へ、自分の子供の數に今も尙それを加へてゐるのも矢張り親の心であらうか。

いかゞですかとすゝめてくれた煙草が、村で買つたものであらう、荷物のためにすつかりつぶれてゐた。櫻井さんは背廣の服でキチンと座つた膝の上に、大きな握り拳を置きな

櫻井さん



がら、冥想でもするかのやうに眼を細め、英霊の武勳を語ってくれた。

「……伴の部隊も、敗走する敵を追つて開封に來ました。敵は城門を固く閉してゐました。そして伴はその門を破る決死隊に加はつたのです。三個の手榴弾を持つて城門に向つて近づきざま、それを投げつけました。城門

はうまく壊れ、突撃路が開かれました。がこの時敵の一弾は伴の腹部に當つて背を貫きました。……櫻井さんの手にある巻煙草から燃へ切つた白い灰が座布団の上にボトリ落ちた。……病院に入つてから傷は間もなく癒へました。元氣な伴はそれからすぐに再び戦線に立つて、敵を黄河まで追つてゆきました。……さりげなく語る櫻井さんの顔を見ながら、私は何故かホツとした。勿論その後になつて亡くなつたに違ひはないが、例へ一時であつても元氣になつて再び戦線に立たれたことを知れば矢張り嬉しかつた。恐らく櫻井さんに

しても同じであつたらう。そして私は、これほどのことをことさらに誇示することもなく淡々と語る櫻井さんの顔に、言ひ知れぬ尊嚴なものを見出した。

私達は云ひ合せてやうに、火の消へた煙草を口にした。

「……しかし、その後になつて何よりも身體の調子がよくないやうでした。無理をしたのがいけなかつたのでせう。十四年の五月二十日、結局病院で死にました。

家を出る時、お國のために一命を捧げると元氣で誓つて行つた通りに、立派に働いて、今では護國の神に祀られました。」

夜が更けたのかも知れない、室の中はシーンと冷へてゐた。遺族の人々はそれぞれ今は神となつた英霊のおもかげを想ひ浮べてゐるのであらうか。それとも英霊の志は必ずわれわれの手によつて完成するぞ、といふ意氣に燃えてゐるのであらうか。狭い一室に烈々たる氣魄がただよつてゐた。



倚る壁の冷たきままに人を戀ふ
浦和清水美江

秋の屋根南風簾花を持ち
評 第一句に「南風」は、誰にでも詠め
方て詠めない、清水サンは近頃詠
方へ眞剣な句を出して、感んで居ら
れる、懸命といふ事は悲しい。第
二句、花を持て行きたい、ちでは
弱い、食慾と強くて来た以上、持
つと受けた方がいいやうな氣がする

愛知廣豐所 酒井廣美

ワタクチモオゲンキデスと子のた

より
評 これだ、すらすらと出た句だ、私が
ふだん作つた句はいやだといふのは
ここのたぐまず、其間に何ともい
へぬ味がある、それがよいのだ、句
主はまだ初めての人のらしいが、何の
作意も無くスラッと詠で居る、夫れ
が尊い所だ、いきなり人の胸を打つ
川柳は神の心をつけて其まますと
通せばよいのである

大森 森田 法晃

あとを繼ぐ話題も無くてただたのし
心の合ふ人同士は、何が無くても嬉
しに、楽しいものである、旨くお詠
みになりましたと感心する外はない
い。水をむやうな川柳は一見頼れ
そうで倒れない

廣島縣 上原四四人

四半分もう四半分梨うまし
評 四半分もう四半分、何といふ巧妙な
着眼だ。今までお目にからぬ言ひ
廻した、嬉しい、餘分の文句は言は
ず梨うましと出た所、チヨイと愉い
もうの二字が活きて働く

小樽 平井 正念

秋の蟬だから我儘させてやれ
評 蟬の發聲、氣味のよい句である、
私達は殺すとか、なぐるといつた句
より助けてやるといつた風氣の氣持の
方の句が見ても心持がよい。句主の
心の中が窺へるからである

栃木 大輪 繁海

胃や腸を包んだ皮で裸である
評 川柳子の見方である、卓見である、
人生を見通した句だ、胃や腸に驅使
されてる裸い人間を見据へての句だ

山口 十合 純信

降らば降れば曇れ案山子
評 深川 細田 初枝

もう母の友もまわちてクラス會
鳥山 萬壽 云海

月の徑親子並んだ影歩き
福島 佐藤 喜代治

秋草の中に乙女は寒くゐる
久留米 松尾 順

秋の蟲永恵ひへびきすぎ

理窟から抜けた身輕き峰の秋
王子 三野 翰章 節
爆音が遠くへ消えた星の色
朝鮮 武内 竹美
尊さに心明るき臨終の座
鳥山 大輪 清

秀吉も同じ日本の土が産み
浦和 清水 美江

ハイヒールひらりお辭儀をして去りぬ
大森 森田 法晃
うつし世に生く喜びに手を合す
北海道 花田 順往

苦も樂もなめつくしたり七十年
名古屋 服部 三十一
映画出て空の青さへよびかける
京都 拜郷 賢三

猿を見る人の背中に暮れかかり
別府海病 淺輪 桃舟
長廊下糸瓜の月へ逆戻り
小樽 平井 善慈

左手の様に世の中諦らめる
鳥山 大輪 清

風に散る紅葉可愛くなつてくる
青森 高松 正豊 坊
病む妻へ日曜の兒らうるさすぎ
愛知縣 吉水 清晃

辨當箱空しき音し子らはしやく
紙面の都合により遺憾ながら
正月號からしばらく柳壇を休載
させて頂きます

平凡への反抗があり言葉を粧ふ
山口 冷 朗
サツカリン咽喉まで届け役が済
松尾 馬 福
み
雨頼のあつさをやつと打ちあけ
川上 三太郎

女の子タオルを絞るやうにすね
古谷 隆 光

辨當を食ふ愉しさと哀れさと
角本 舞 郎

バス来らず靴の定價を見てゐた
り
竹 泉 明 兒

毯嚙つて子の頬いよよ豊かなり
内田 日出 美

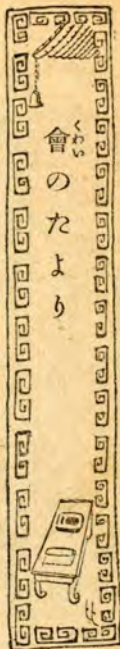
ライター點らず偽瞞の貌くもる
坂口 丘 翁

愛憎の累々とある歳去りぬ
福岡 阿彌 三
塔の尖な星截るを眼に痛き
小林 萬 川

ほんとうの年を教へて女給酔ひ
上野 隆之 介

セーターが脱げない臍を樂くら
れ

會のたより



十一月の誌友會

華やかな信仰の一夕

浅草區 玉蓮院で開催

東京方面十一月の本會誌友會は去る十一月五日午後六時半から浅草區石濱町一丁目八番地玉蓮院(住職古屋諦道師)で催した。中野隆雄氏の司會のもとに、先づ戸

特志寄附者芳名

本會事業資金にと左の如く特志寄附下されました。

一金五圓也

大阪市東淀川區豊崎東通

二丁目源光寺

藤野立本氏

松學英師導師となり出席者一同唱和して出征將士武運長久、英靈追善の回願をなし、念佛一會を修した。次いで、戸松學英師の講演に移り、同師から徳川家康の念佛信仰を中心にお念佛と日常生活について、それが如何に力強いものであるか、念佛の生活が最も身近のところから始められ、明るい生活となし得るかを聴いた。それが終つて濱野義光師の紙芝居「勢至丸さま」があり、また同師指導の

鹿兒島支部の

時局講演會

もとに厚生體操を行ひ、最後に佐藤良智師解説の幻燈「法然上人御一代記」を映じて十時過ぎ散會し

本會鹿兒島支部では淨青鹿兒島支部との共同主催のもとに去る九月十九日午後七時から鹿兒島市公會堂に於て宗教報國臨戰翼賛時局大講演會を開催し、本會相談役文學博士椎尾辨匡師の講演を聴いた。椎尾博士は「世界の動亂を解決する日本」と題し、歐洲狀勢並に日本國民の覺悟と決心を強調したのち、結局は正信に住する腹の人の魂の人をつくるにありと斷じ、これがためには宗祖法然上人の念佛信仰によることこそ最も時局に相應しいと二時間十五分に亘る大獅子吼を結んだ。最後に本會幹事

た。尙同會は玉蓮院女子青年會から、多數出席があり華やかな信仰の一夕であつた。

奥善宏氏の閉會の辭があつて、盛況裡に散會した。

淨土宗報國會

報國講演の催し

淨土宗報國會本部、同報國會東京支部が主催となり、大政翼賛會の贊助のもとに十一月五日午後一時から九段軍人會館に於て「宗教報國講演會」を開催した。先づ江藤滋英氏の挨拶に始まり、次いで友松圓諦師の「時局と淨土教」森崎善一氏の「時局と國民生活」と題する講演があつた。尙同會は定刻前すでに陸續として集まる聴衆によつて滿され、大講堂は立錫の餘地なきまでとなり、非常な盛會であつた。

◇内地の皆様御元氣ですか。小生
おかげさまで至極元氣にて軍務
に服してをります。満洲も日増に
寒さは氷が張つてゐます。一
日の演習を終つて歸つてから我々
を慰めてくれるものは内地からの
便りです。また「浄土」を拜讀いた
し一日の勞苦を忘れて明日の準備
に進みます。こうして活躍出来る
のも銃後の皆様のおかげです。ど

うぞ、會員の皆様宜しく、(満洲
國龍江省チ、ハル滿洲第〇〇〇部
隊加藤隊、伊勢山昇次)
◇増谷文雄師の「行誼上人」は嬉
しかった。更に精細に浄土門の清
深満久、村上專精、又は前田、南
條諸師と、要するに讀者の信念と
奮起を促すやうなものを御連載下
さい。(荏原區二葉町五〇七、上島
直明)



浄土の到着を千秋の思ひで、

荏原區中延 阿部千代畫

◇會
員の
皆々
さま
如何
お着
しで
すか
わた
くし
達が

お念佛をたよりに力を
合せて少しでもお國の
ために働きたいと存じ
てゐます。毎號吉田絃
二郎先生の御隨筆を樂
しみにしてゐます(本
所、大平町、神山絹子)
投句と投書
歌壇、俳壇、の御投
句やその他の投書につ
いて、必ず住所氏名を
御明記下さい。住所氏
名の記載なきものは臨
時郵便取締に基く命令
に違反することにな
り、當方には配達され
ません。郵便局から特
に御注意がありました
のでこの種の違反なき
やう願ひます。

年末、年始御贈答の

正月號購入御豫約につき

本誌正月號を御檀信徒や御知友に年末
年始の御贈答品として御利用下さい、信
仰家庭雜誌として多大の御好評を得てを
りますが、勝手ながら正月號の購入御豫
約は左の通りにお願ひ致します。

申込期日 豫約申込みは十二月五日ま

でに當方に到着のこと

誌代 十部以上申込みの方に限り送料

とも一部金十錢の割とし、申込と同

時に拂込のこと

これまででは申込期日〆切後になつて多
數の御申込みに接し、残念ながらその分
は全部お断りいたし、甚だ御迷惑をおか
けしましたので、何卒なるべく早く御購
入部數をお申込下さるやう願ひ上げま
す。〆切期日後の御申込には應じ兼ねる
ことがあるかも知れません。



法語
解説

何うして信仰に入る

十二箇條問答より

中村 辨康

(法語抄八、——十二箇條問答)

(二) 入信の因縁

問ふていはく、かやうの愚痴の身には、聖教をも見ず、惡縁のみおほし。いかなる方法をもてか、わが心をまもり、信心をももよほすべきや。

答へていはく、そのやう一つにあらず、あるひは人の苦にあふを見て、三途の苦をおもひやれ。あるひは人の死ぬるを見て、無常のことはりを悟れ。あるひはつねに念佛してその心をはげませ。あるひはつねによき友にあひて、心をはちしめられよ。

人の心は、おほく惡縁によりてあしき心のおこるなり。されば惡縁をば去り、善縁にちかづけといへり。これらの方法ひとしなならず、時にしたがひてはからふべし。

(問)

私達は生れながらに迷執が深くふかくこびりついて居て、いろいろの煩惱妄念にとざされて居りますから、本心では覺醒したいと思つて居りましても、それはたゞ時偶に起るホンの僅かな閃きにすぎなく、毎日の色々の縁にふれて、唯だあくせくと徒らに明しくらして居るばかりでございします。このやうにして居りましては到底輪廻の羈絆から脱することも出来ず、生き替り死に替り苦しみの泥海の中にもがいて居るばかりでございします。

さればと云つて元來が愚かなものですから、尊い經典をひもといて見てもよくは判りませんし、また讀む暇もなくテンで讀む氣にもなつて居りません。しかも私達の身のま

はりに寄せて来る幾多の事象は、その凡てが不平か、不満か、或は退屈か、焦燥か、若しくは唯だ徒らに私利を追ひ求むる心かで、歴縁對境の凡ては、悉く貪瞋痴を誘ひ出す惡縁のみと云ふべき状態でございます。

このやうな者と致しましては何う云ふ方法を用ひて、本心の命するところを守り、信仰の心を喚起することが出来ますでせうか。どうか信仰に入るべき方法を御教示願ひたいものでございます。

(答)

信仰に入る様相は人に依つて色々ですから、一樣に申すことは出来ません。が然し、その基底となるべきものは、私達の自分自身に對する反省でございます。その反省に大體二通りございます。一は罪惡觀、二は生命觀若しくは無常觀であります。その罪惡觀は人生の苦から導かれる反省で、釋尊は無量壽經に「老病死を見て世の非常を悟り」とありますやうに、老人と病人と死者とを見て、人間の到底まぬかれ難い苦を如何に脱却し得べきかと云ふ問題を解決すべく道を求められたさうですが、それと同じやうに、他人の苦難を見てそれを我が身にふりあてゝ求道の心を起す人もありませうし、更にそれから類推して刀塗(刀で切り

さいなまれるやうな地獄的生活の苦) 火塗(火でやかれるやうな餓鬼的生活の苦) 血塗(血で血を洗うやうな畜生的生活の苦)の三塗の苦しみを思ひやつて、さうした痛ましい生活に沈淪しない解脱生活を打ち立てたいと志す人もあるでせうし、また、苦とは畢竟我がなした行ひの結果に外ならずと考へて、この惡縁にのみ觸れ行く人生を信仰に依つて清めんと願ふ人もあるでせうと思ひます。

また生命觀無常觀と言ふのは、親しいものの死に遭遇して人生のはかなさを感じ、この限られた生命のある間に眞實の信仰を得たいと望む人もあるでせうし、また定めある壽命をして眞實の生命たらしめなければ、人間として生れ出た生甲斐もないから、一日も早く眞正生命を樹立しなければならぬとして、佛の無量壽の中に、無量光のなかに一生を生き貫かんと思ふ人もあらうと思ひます。それが生命觀から来る信仰への志向でございます。元來「無常」と云ふことには、消極と積極との二面觀察があります。一般に考へられるものは、多く消極的なもので「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常と響くなり」などと使はれて居り、従つて厭世的な言葉かのやうに思はれて居りますが、それは消極的な一面もあるからであります。然し本當には字の如く「常

なき」こと即ち變化すると云ふ意味であつて、文字の使ひかたも諸事諸物とは云はず、諸行と云つて居ることに注意しなければなりません。一切の事物は單なる存在ではなくして、時間的存在即ち刻々に流れ行く動作であり作用であり變化でありますから、一定不變の「常恒態」ではなく「無常態」なのであります。若し假に一切の事物が「常恒態」であるならば、進化發展と云ふことはあり得ない譯でありますから、むしろさう云ふ思想こそ本當の消極思想であつて、そこには積極性が寸毫もありません。

随つて「生死」と云ふ問題を單にこの五尺のからだの生き死と考へて居る「分段生死」をのみ生死と考へてはならないのであります。よく云はれる「發展的解消」と云ふこと即ち「變易生死」こそ本當の生死であります。

しかも刻々に時間は過ぎて行きます。私達の生きて行く時間は、それが有効に使はれやうが或は無駄になつて行かうが、そんなことに頓着なく、過去へ過去へと刻々に流れ去つて居ります。一とたび過ぎればまた再び歸へられない時間です。だから出来るだけ本當の時間にして行かなければなりません。況して私達は與へられた時間は三十年か、五十年か、七十年か、自分自身にさへ分つて居ない限られた

時間ですから、少くとも現に生きて居る此の今の時間を最も有効にすることが大切であります。しかもこれをよくよく辨へることが「無常のことばり」をよく知つて居る人とは云はれ得るのです。

然しかうした罪惡觀や無常觀は唯だ理論だけ聞いても中「わがもの」にはなりません。自分を深く堀り下げる爲には、單に外部からの見聞覺知だけでは、瞬間的反省はあり得ても永續性がないから、その底をつくことが出来ないと思ひます。

この故に何うしても「念佛」する必要があります。念佛は簡單な「南無阿彌陀佛」を唱へることで、何でもありませんが、この何でもないことが私達には中々思ふやうにならないのです。一生懸命にやつて見ても、雜念妄念が群り起つて、本當に聲に出すまゝの心になれないから變です。茶碗と云つたら茶碗が思はれ、猫と云つたら猫が思はれるやうに「南無阿彌陀佛」と云つたら、阿彌陀佛に南無する心になれさうなものです。それが何うしてもさうなれません。如何にあせつても、如何に我が身をせめても、何うしてもうまう行きません。畢竟注意力が散漫だからであります。脳味噌がお粗末だからであります。元來念佛中

に雑念がまじるのは「南無」と「南無」との間隙に起つて来る現象で、阿彌陀佛が空になつて居るからです。ですから本當に如來様にすがり如來様にたのむ氣持が熾烈になつて居ないと雑念が起るのは當然なのです。さうわかつて居てそこを注意しようとしても注意が散漫になつて、いつとはなしに雑念妄念の人となつて居るのです。

道を求むる心が少しでもあれば、この簡單な念佛一つが自分の思ふやうにならない現實を反省して、何と云ふ淺ましい愚か者であらうかと、善導大師の謂ゆる「信機」の念が溢いて来るであります。

つまり罪惡觀が痛切になつて来るのは當然であります。

それからは一層如來様に「南無」する氣持になれます。いよく本氣で歸命し合掌する氣持になります。之れが即ち「信法」で、念佛することに依つてこの「信機」の自己反省と「信法」の如來様へ歸命する氣持とが、段々くりかへされ、はげまされて、前にいり／＼承つたお話しも漸くわがものになつて解つて來ますし、つとめてよい友に接近して、或はおのづから我が心がはづかしくなり、或はおのづから精進する氣持が増大されて行きます。

此故に信を求むるには「念佛」するのが一番よろしいの

です。念佛なくして唯だお話をきくだけでは概念的な信仰に止まつて、眞實な信仰にはなれないかも知れません。

一般に多くの人は信仰と云ふものを思ひ違ひして居るやうです。それに幾通りもあるやうですが、ごく幼稚な考へは、信仰を得て居れば物事がすべて都合よくなると思つて居るらしいことです。次ぎには信仰を得れば喜びばかりの生活になれると思つて居ることです。それから一つは信仰を得れば恰かも一遍に聖者にでもなれたかの如くに思つて居ることです。さうかと思ふとまた一方には信仰は個人的解脱を求めるもので、國家にも社會にも何の關係のない小乗的なものかの如く思つて居るらしいことです。大ざつばに分けると、以上のやうな四種の考へがあるやうですが、皆な偏つた考へでありまして、本當の信仰を知らないからです。無論さうした一面も見へるから入信過程の上や、外部からの見方として、さう云ふ批評も出來ませうが、それは決して完全な見方ではありません。

物的に都合がよくなると云ふ考へは無論間違つて居ります。そんな功利的な信仰は正しいものではありません。唯だ心がさうした貪求から段々脱却が出來るところに、都合がよくなつたと言つて云へないこともありませんが。第二

の喜びばかりの生活と云ふことも、單なる快樂主義的な目的からでは、是亦た正しいものではありません。苦樂交雜は人生の常態であつて信仰にはいつたからと云つても、苦がなくなつて樂ばかりになると云ふ道理はありません。唯だ苦を苦として忍従し得るだけのことです。第三の聖者になれると云ふ考へも間違ひです。もし聖者になれるなら、もうその人には信仰はいらないからです。聖者になれる以下劣なものなればこそ、信仰を求めるのであり、何處までも如來を仰いで行くのです。常に向上の一路を志さず入信道は、進めば進む程、尙ほ自分の足らないことが一層明らか認識されるのです。そこにこそ生きた信仰があるのであつて、完成したと自惚れたら、もう行きどまりであり、行きどまりであります。殊に生活と云ふものはたとへ精神轉換が出来ても、從來の習慣性を手の平をかへしたやうに變化させ得ないものです。順次に改善して行かなければなりません。沙彌からすぐ長老にはなれないのです。人間性の弱い一面が信仰に依つて端的に清められるわけはありません。凡夫は何處までも凡夫なのです。聖德太子ほどのお方でさへ「共に是れ凡夫のみ」と云つて居られるではありませんか。また第四のやうに個人的解脱のみを求める信仰

は小乗的なもので、共同性、國家性の宗教は排除されねばならないと云ふ考へ方は、少くとも佛教に關する限り一方的な見方であつて正しい完全な觀察ではありません。佛教の教理は如何に宗派が異つて居ても、その哲學的裏付として「緣起觀」に立脚して居ないものはありません。随つて單一な孤立體を認めませんし、自分一人だけよければと云ふ考へは必ず訂正されて行くべきものであります。事實上に個人生活は成り立ちませんから、信仰も進めば進むほどいよく共同性をもつて來るものです。誠に他の多數の人の共鳴なき信仰は信仰として自分自身にも納得されませんし、自分一人だけでは自分さへ完成されません。人間の考へは「我執」に縛られて居るから信仰を求める最初に當つては、或は個人解脱を求めることから出發するかも知れませんけれども、元來「解脱」と云ふことは、さうした「個我」的な固執觀念からぬけ出ること、信仰の眞實性がわかればわかるほど、社會性となり國家性となつて行くものです。個々の細胞が健全であつて初めてからだの全體が健全となるやうに、個人自らの考へが、信仰に依つて健全な「背私向公」の觀念となるところに、國家それ自體も正しい結束と發達とが將來されるものだと思ひます。信仰に依

て初めて「無我」の正見が出来るからです。

けれども私達は何處までも凡夫です。無始曠劫の昔からの迷執がこびりついて居りますから、ともすれば私益優先になりたがつて正しい國家生活社會生活を営むことが出来ません。惡縁のみのたづらに多くして、善縁は見のがし勝です。此故に正しい信仰を進めるには努めて善縁に近づき、つとめて先輩なり友人なりを得ることであります。かくして起り勝た煩悩妄念の拙ない心を耻しめ、間違つた考へを訂し、以て白道を精進しなければなりません。

無論その人その人に依つて、善縁の現はれかたも違ひませう。その時その時、その場合その場合皆な一樣ではありますまい。ですから信を求め行く生活相も境遇に依り環境に依り修養に依り教養に依り夫々の性質に依り各人各様でせうから、誰でも同じと云ふ譯に行きません。時に従ひ縁に従つて本心の求むるところを押し進めて行かなければなりません。但しその本心の羅針盤を何うするか問題です。その羅針盤は何と云つても佛を念ずるところの「念佛唱名」より外にありません。念佛には選擇性があることであります。このことに就いてはまた追々に申し上げることとなりませう。

(四三頁より續く)迷妄の邊見たる斷見であります。

問題の問題たり得べきは有無の問題ではなく生命の問題でなくてはなりません。日本の日本たり得る中心は「無窮の國運」と云ふことであつて日本の量的存在の上に論すべきではありませんやうに、一切の問題は有るとか無いとかを問題にすべきでなく生命的價値の多少に就いて考ふべきです。ことに宗教上の問題では兎角迷悟をこつちやにして考へたがるやうですが、迷の問題と悟の問題とをハッキリ區別して考へなくてはなりません。佛教で「無我」を主張するのは「有我」固執の邊見を打ち破る爲の理論であり、私達の日常生活の指導理念として最も重要だからであります。即ち人々の迷妄を開かせる爲の理念です。固執即ち塊を作つてはいけないうに、私達は「我」だの「魂」だのと固い塊を作り上げて居るのが現状です。この迷界の上から言ふならば、我もあり魂もあり惡平等もあり惡差別もあり、苦樂喜怒哀樂もあるのであつて我もなく靈魂もないと云ふのではありません。然しそれでは正しい生活が出来ないのであります。また極樂は理想世界です。覺醒者のみの住む世界です。惡平等のやうな不完全の世界ではありません。それは覺の世界、悟の世界であつて迷の世界不覺の世界から眺めたものでは畢竟「よいの隨から天井のぞく」と云ふものです。判る筈はありません。根本理念が違つて居るからです。

編輯後記

◇云ひしれぬ緊張の内に、今年もこれで終りました。一年を回顧するといふやうな餘暇もありませんが、新しい年はまた更に新しく張り切るためには、一應はふり返り内省することが必要でせう。

◇皇軍將士の「元氣一杯」といふ言葉ほど意味深いものはありません。つまり士氣旺盛といふことです。前線で元氣さへあれば、如何なる困難も必ず突破出来るさうです。

◇時局はますます重大に違ひありませんが、しかし重大であるというに出したり、論議したりする時期は過ぎ去りました。われ／＼は唯實行あるばかりです。覺悟を固めるのでなくて、覺悟を實踐するのです。

◇例へば「戦地を偲んで」行動

を律するのでなく、戦地と同じ困難と緊張の中で暮らすのです。もと戦地と銃後と區別して考へてゐた人が誤りなのです。

◇臨戦五年にして内地に未だ一發の爆弾も落ちず、三度の食事が満足に攝れてゐることが不思議な位に有難いのです。

◇この有難いといふことが判らないやうではお念佛の申しかたが足りないからです。お念佛からは自づと報恩が湧いて來ます。

◇慣れないことに専心すると、どうも短氣になるやうです。何かあつて腹がたつたらお念佛を申すのを忘れてゐたのだと思ひつくべきでせう。

◇私達は心を合せて進みませう。お互同士が助け合つてゆきませう。お念佛を申す心で先づ自分が生きて、他をも生かしましょう。會員各位の御健闘を祈ります。

◇吉田絃二郎先生の御後援を深

謝し、今後とも相變らず御指導下さるやうお願い致します。

◇高瀬承殿氏の「佛名會のおはなし」は例によつて興味深い講話です。

◇「或る病兵の手紙」は一まづ終ります。不返轉の信仰には未だ遠いやうですが、僅かな月日の努力で信仰が獲られるわけもありますまい。ただ生死の間を待つた貴重な體驗の一駒です。

◇會員諸氏から寄せられた實話原稿は、その数が多いに拘らず紙數に制限があり發表の出來なかつたことをお詫び致します。

◇昨年の正月號豫約申込みには早く賣切れとなつて多大の御迷惑をかけました。今年はぜひ十二月五日の締切前までに申込んで下さい。

◇住所變更の際は必ず前住所も御明記の上で御一報願ひます。本誌不審の場合もお知らせ下さい。

淨土 十二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年十二月十日印刷納本
昭和十年十一月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園五號地一〇
編輯兼 眞野正順
發行人 眞野正順

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄
東京市牛込區櫻町七

印刷所 日本印刷株式會社
配給元 東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑑仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料五厘)

會費 金一圓二十錢

(送料共)

一ヶ年

中里介山著

(三六版 二五〇頁)

法然上人傳

定價 六十錢
送料 六錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價 二十錢
送料 三錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價 二十錢
送料 三錢

藤井實應編

(菊半裁一四四頁總ルビ付)

法然上人法語抄

定價 三十錢
送料 六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二世紀總ルビ、三〇〇頁

法然上人別傳 掬水譚

定價 四圓五十錢
送料 二十二錢

文豪の手による古典の通俗化！法然上人傳として最も權威ある「勅修御傳」を、雅文をそのままにして、しかも安易に一讀出来るもの、法然上人を知らんとするには先づ傳記から始められよ！

生、死、佛、本願、信と行、念佛の集ひ、社會生活、女性、家庭生活念佛の意義の各項目に別けて本宗の新鋭が、一般讀者を目標に新鮮な材料によつて解説した念佛信仰の手引！

非常時局下、人心の確固たる統一を期する時、一道の光明燦然として信仰の正道を指示す。萬人のための宗教、淨土教の信仰を説くこの書こそ現代人が信仰の書。

信仰の珠玉凝つて一卷をなす。清浄なる上人御道文中より、現代生活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の掬句、これぞ生活の根底である。

大母、東日兩紙に連載し百萬讀者を魅了した當代隨一の宗教文學、高き藝術の香氣と深き信仰の把持、小杉放菴畫伯の氣品高き挿畫と相まつて一大美術品！

法然上人鑽仰會

振替東京芝區芝公園明照會館
振替東京芝區芝公園明照會館
番七八一二八

廣島文理科大学教授
文學博士

山本幹夫著

新刊 法然佛教とわが國體思想

神國日本の教法として開創された法然佛
教を歴史的に解明す。時局下必讀の書！

日本佛教の發展が法然佛教に到つて初めて萬民翼賛の教法として
現れ大成されるまでを總ゆる資料により解明されてゐる。

先づ日本佛教と日本國體とを中心にして、神國日本の教法として
佛教が展開し來つた史的實相を示す本書こそ、淨土教徒のみなら
ず廣く萬人の知らんとするところである。わが國ならではと思は
しめる新宗の開創の根據を説いて餘りなし

わが國體思想からみた
法然佛教の新しい基礎づけ

A5型クロース装箱入
價 二圓二十錢
送料 十錢
會員に限り
送料當方負擔

目次

序論

一、法然佛教の前提
二、法然佛教の機構

本論

第一編 日本と日本佛教

三、神の國と人の國

四、神道と佛法

五、天照大御神

六、祭政・教一如

七、國體と國民道德と教學

八、肉身的と法身的

第二編 日本佛教の展開

九、佛教の公傳以前

一〇、佛教公傳紀とその背景

一一、日本佛教の發足

一二、十七條憲法

一三、日本佛教の原理

一四、國家佛教

一五、國家佛教の内外

一六、平安佛教の歸結

第三編

一六、法然佛教序觀

一七、新宗開創

一八、法然上人の宗教體系

一九、選擇本願念佛

二〇、平等の慈悲

二一、萬民翼賛の教法

發行所 法然上人鑽仰會

東京芝區公明會館
振替東京八二一七八番

昭和十年五月廿日第二種郵便物認可（毎月一回）日發行
昭和十六年十月廿日印刷納本昭和十六年十一月一日發行

淨土 第七卷 第十二號

定價 金十二錢（送料）
滿鮮等 金十三錢
外埠定價